福岡市埋蔵文化財調査報告書第570集

中南部(5)

－五十川遺跡群第３・４次、雑餉隈遺跡群第９次調査報告－

1998

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第570集

中南部(5)

－五十川遺跡群第3・4次、雑餉隈遺跡群第9次調査報告－

1998

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による五十川遺跡群第３・４次、雑餉隈遺跡第９次調査では多くの成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成10年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

本文目次

§1　五十川遺跡群第3次調査
Ⅰ　はじめに
1．調査にいたる経過……1
2．調査の組織……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　発掘調査の概要……3
Ⅳ　遺構と遺物……4
1．検出遺構……4
2．出土遺物……12
Ⅴ．小結……20
§2　五十川遺跡群第4次調査
Ⅰ　はじめに
1．調査に至る経過……23
2．調査体制……23
Ⅱ　調査の記録……26
1．調査概要……26
2．遺構と遺物……26
3．小結……34
§3　雑餉隈遺跡第9次調査
Ⅰ　はじめに
調査に至る経緯……41
調査組織……41
Ⅱ　調査の記録……42
調査の概要……42
1）竪穴住居跡……42
2）掘立柱建物……44
3）土坑……44
Ⅲ　まとめ……52
Ⅳ　自然科学分析……パリノ・サーヴェイ株式会社　53

表目次

第1表　出土土器計測表……22

挿図目次

§　五十川遺跡群第3次調査
第1図　福岡平野の主な遺跡(1/50,000)……2
第2図　五十川遺跡群第3次調査周辺地域図(1/500)……3
第3図　五十川遺跡群第3次調査遺構配置図……折り込み
第4図　竪穴住居跡実測図……5
第5図　掘立柱建物実測図(1)……6
第6図　掘立柱建物実測図(2)……7

第７図　溝・井戸・貯蔵穴実測図……8
第８図　井戸・土壙実測図……9
第９図　土壙実測図……10
第10図　土壙墓実測図……11
第11図　ＳＥ02出土遺物実測図(1)……13
第12図　ＳＥ02出土遺物実測図(2)……14
第13図　ＳＥ02出土遺物実測図(3)……15
第14図　ＳＥ02出土遺物実測図(4)……16
第15図　土壙・柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図(1)……17
第16図　土壙・柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図(2)……18
§　五十川遺跡群第４次調査
第１図　調査区位置図(1/500)……24
第２図　全体図(1/150)……25
第３図　井戸実測図(1/40)……26
第４図　SE009　・013 出土遺物実測図(1/3)……27
第５図　土坑実測図(1/40)……28
第６図　竪穴実測図(1/40)……29
第７図　SK005　・006 、SC012 出土遺物実測図(1/3)……30
第８図　SD001 土層実測図(1/40)……31
第９図　SD001 出土遺物実測図1 (1/3)……32
第10図　SD001 出土遺物実測図2 (1/3)……33
第11図　SD010 土層実測図及び出土遺物実測図(1/40 、1/3)……34
第12図　その他の遺物実測図(1/3)……35
§　雑餉隈遺跡第９次調査
第１図　調査地点位置図(1/4,000)……41
第２図　雑餉隈遺跡第９次調査遺構配置図(1/150)……折り込み
第３図　竪穴住居ＳＣ－０９、１７(1/40)……43
第４図　竪穴住居出土遺物(1/3)……45
第５図　掘立柱建物ＳＢ－０１(1/60)……46
第６図　掘立柱建物ＳＢ－０２(1/60)……47
第７図　ＳＢ－０２出土遺物(1/3)……48
第８図　土坑１(1/60)……49
第９図　土坑２(1/60)……50
第10図　土坑３(1/60)……51
第11図　土坑出土遺物(1/3)……51

図　版　目　次

§　五十川遺跡群第３次調査
図版１　(1) 五十川遺跡群第３次調査区中央（南東から）
　　(2) 五十川遺跡群第３次調査区東側（南から）
図版２　(1) 五十川遺跡群第３次調査区中央（西から）
　　(2) 五十川遺跡群第３次調査区西側（東から）
図版３　(1) ＳＥ02井戸七層（南から）
　　(2) ＳＥ02井戸（北から）
　　(3) ＳＥ02井戸（東から）

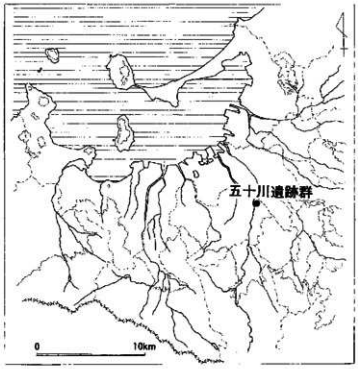
(4) ＳＥ04井戸（南東から）
図版４ (1) ＳＤ06溝土層１（南東から）
(2) ＳＤ06溝土層２（南東から）
(3) ＳＤ06溝北壁面（南東から）
(4) ＳＤ06溝南壁面（北西から）
図版５ (1) ＳＫ05貯蔵穴土層（南東から） (2) ＳＫ05貯蔵穴（南東から）
(3) ＳＫ26土壙土層（東から） (4) ＳＫ26土壙（東から）
図版６ (1) ＳＢ03竪穴住居跡（南東から） (2) ＳＫ10土壙（西から）
(3) Pit336ピット状遺構（南西から） (4) Pit365遺物出土状況（東から）
図版７ (1) ＳＸ22土壙墓（西から） (2) ＳＫ23土壙（南から）
(3) ＳＸ20土壙墓（北東から） (4) ＳＸ20土壙墓（南東から）
図版８ (1) ＳＸ29土壙墓（南から） (2) ＳＸ29土壙墓（西から）
図版９ SE02出土遺物(1)
図版10 SE02出土遺物(2)
図版11 SE02出土遺物(3)・SX29出土遺物
図版12 SE02出土遺物(4)
図版13 SE02出土遺物(5)
図版14 SE02出土遺物(6)
図版15 SE02出土遺物(7)
図版16 SX22・SK17出土遺物
図版17 その他の遺構出土遺物(1)
図版18 その他の遺構出土遺物(2)
§ 雑餉隈遺跡第９次調査
図版１ (1) 調査区全景（南から） (2) ＳＣ－０９完掘状況（東から）
図版２ (1) ＳＣ－１７完掘状況（南から） (2) ＳＢ－０１完掘状況（南から）
図版３ (1) ＳＢ－０２完掘状況（西から） (2) ＳＫ－０１完掘（北から）
(3) ＳＫ－０２完掘（北から） (4) ＳＫ－０３完掘（北から）
(5) ＳＫ－０４完掘（北から）
図版４ (1) ＳＫ－０５完掘（北から） (2) ＳＫ－０６完掘（北から）
(3) ＳＫ－０７完掘（北から） (4) ＳＫ－０８完掘（北から）
(5) ＳＫ－１２完掘（西から） (6) ＳＫ－１６完掘（東から）
(7) ＳＫ－２４完掘（南から） (8) ＳＫ－２７完掘（南から）

写 真 目 次

§ 五十川遺跡群第４次調査
写真１ 作業風景
写真２ 調査区全景（西から）
写真３ 調査区全景（東から）
写真４ SE008(東から)
写真５ SE009(東から)
写真６ SE013(南から)
写真７ SE014(東から)
写真８ SC011(北から)
写真９ SC012(北から)
写真10 SD001 十層1
写真11 SD001 上層2
写真12 SD001 十層3
写真13 SD010 上層
写真14 SD010(北から)
写真15 出土遺物

§ 雑餉隈遺跡第９次調査
写真１ 作業風景

五十川（ごじっかわ）遺跡群第３次調査



遺跡略号　GKJ－３
遺跡調査番号　9538

例　言

1．本編は共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成7(1995)年度に発掘調査を実施した福岡市南区五十川2丁目248他所在の五十川遺跡群第3次調査の報告である。
2．本編に掲載した遺構と遺物の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎の他、遺構を久住猛雄（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）、北村幸子、藤野洋子、遺物の一部を林田憲三があたり、撮影は佐藤が行った。
3．製図は遺構を藤村佳公恵、遺物を佐藤が行った。
4．本編の執筆は佐藤が行った。
5．本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されれるので、活用されたい。

Ⅰ はじめに

1 調査にいたる経過

1995（平成7）年9月25日、谷圭井子氏から本市に対して南区五十川2丁目248.110-5.110-4 における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの五十川遺跡群の東縁に位置し、現況は畑である。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1995（平成7）年10月11日に試掘調査を実施した。調査の結果、東側では耕作土直下に、西側では耕作土下に10cm程の遺物包含層をはさんで地山の鳥栖ローム層が確認され、その上面で遺構を検出した。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積1,187.72㎡の内工事で破壊を受ける建物部分 1,100㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。谷圭井子氏と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年11月6日から翌1996（平成8）年1月9日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 谷圭井子
調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝
第2係長 山口譲治
庶務担当 西田結香（前任）河野淳美
調査担当 試掘調査 山崎龍雄 池田祐司
発掘調査 佐藤一郎
発掘調査・資料整理協力者 尾花憲吾・柴田博・中村米重・森本芳樹・伊藤美伸・尾崎真佐子・河津信子・桑原美津子・古賀美恵子・為房敏子・播岩博子・福田友子・藤野洋子・藤原直子・山口慶子・吉住シヅエ・萬スミヨ・相川和子・田中ヤス子・藤野邦子・藤村佳公恵

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の谷圭井子氏、施工の有限会社グランホームズをはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

五十川遺跡群は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。その範囲は南北約800m、東西240m、標高は9～11m前後を測る。五十川遺跡群が位置する台地はその南東の春日丘陵から標高を北に下げながら延びる低丘陵上に立地する。同じ連続する台地上に位置する北側の比恵遺跡群、南側の五十川遺跡群とは本来は一連の遺跡である。春日丘陵からベルト状に延びる丘陵群には「奴国」の拠点とされる遺跡群が分布している地域である。弥生時代には当遺跡の他に比恵遺跡群や南東側の台地上の板付遺跡など大規模な集落が営まれている。古墳時代以降も引き続き丘陵上では集落が展開し、那珂川流域には

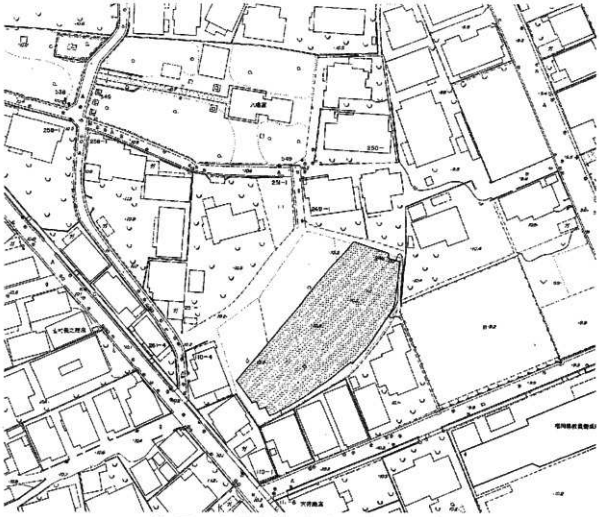
1．博多遺跡群　6．比恵遺跡群　11．雀居遺跡　16．須玖永田遺跡　21．野多目遺跡　26．南八幡遺跡群
2．福岡城　7．那珂遺跡群　12．五十川遺跡群　17．須玖岡本遺跡　22．野多目坂渡遺跡　27．雑餉隈遺跡群
3．堅粕遺跡群　8．那珂深サ遺跡、那珂君休遺跡　13．井尻遺跡群　18．須玖四丁目遺跡　23．井相田遺跡群
4．指崎遺跡群　9．板付遺跡　14．日佐遺跡群　19．赤井手遺跡　24．老司遺跡群
5．吉塚遺跡群　10．諸岡遺跡　15．須玖唐梨遺跡　20．二宅廃寺　25．三筑生産遺跡

第1図　福岡平野の主な遺跡(1/50,000)

首長墓とされる前方後円墳が築造される。当台地のほぼ中央に福岡平野では最古の前方後円墳である那珂八幡古墳、その北約500mには筑前地域最大級の東光寺剣塚が築造されている。比恵遺跡群内では墳丘および主体が失われ周溝のみが残る円墳が確認されている。板付南台地上においても古墳が築造されている。比恵遺跡群では6世紀後半代の大型倉庫群、建物、柵が検出され、536（宣化元）年に設けられた「那津官家」に関連する遺構と推定されている。那珂遺跡群ではそれに続く時期からその後8世紀前半に至るまでの正方位に主軸をとる溝、大型建物が検出されている。6世末から7世紀初頭にかけての古い時期の瓦の出土例もあり、「那津官家」もしくはその後身に関連する官衙的な施設、あるいは郡衙が営まれていたと考えられている。中世には台地上で区画溝をめぐらせた居館とみられる遺構が数次にわたって検出されており、その性格、区画内の遺構の状況がよくわかっていないなど今後検討されるべき課題が多い。

Ⅲ　発掘調査の概要

五十川遺跡群第3次調査区は五十川遺跡群の東縁中央部分に位置し、標高9.7mを測る。第1次調査区（旧遺跡名五十川赤目遺跡第1次調査）および第2次調査区（同五十川赤目遺跡第3次調査）の南約200mに位置する。住宅地に囲まれた第3次調査区の現況は畑であった。



第2図　五十川遺跡群第3次調査周辺地域図(1/500)

調査はバックホーによる表土剥ぎを北東部分から始めた。遺構面は耕作土直下の鳥栖ローム層上面で検出した。調査区域が畑地として利用されていたためほぼ平坦に削平を受けていたが、西側では耕作土下に10cm程の遺物包含層が残存していた。弥生時代から中世後半までの遺構が検出されたが、中世後半の遺構が調査区のほぼ全域に分布し、遺構の残存具合が良好であるのに対し、弥生時代から古代にかけての遺構は台地の縁辺部に近い北東部分に限られ、削平を受けた度合いが大きい。本来は南西から東北の縁辺へ下がる緩斜面をなしていたが、中世後半期に平坦に造成され、さらに畑地として利用される際に大きく削平を受けたものと推察される。

検出した遺構は弥生時代中期後半の土壙（貯蔵穴が大きく削平を受けたものとみられる。）1基、弥生時代終末の竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、4世紀前半の土壙3基、6～7世紀の掘立柱建物1棟、9世紀の井戸1基、土壙1基、11世紀前半の土壙墓1基、14～15世紀の溝5条、井戸1基、土壙3基（内2基は土壙墓とみられる。）、掘立柱建物9棟の他柱穴多数である。

Ⅳ　遺構と遺物

1　検出遺構

竪穴住居跡ＳＢ03（第4図、図版6）　調査区の中央で検出した。平面形は長方形を呈し、全長5.2m、幅4.7m、深さは中央部で20cmを測る。幅0.2m、深さ25cmの壁溝が四方にめぐる。北東と南西に幅60cmのベッドを設け、床面の北西壁から1.2m、南西側のベッド中央下の北東に幅0.2m、深さ7cmの溝が矩形にめぐる。方位はＮ－44°－Ｗにとる。図中梨地の柱穴2が主柱とみられる。床面で炉跡、焼土は検出されなかった。

掘立柱建物　計11棟の建物をまとめることができた。

ＳＢ31（第5図）　調査区の東側で検出した。梁間2間、桁行3間の南北棟である。梁間の全長4.1m、桁行の全長5.8mを測る。柱穴は円形で、径32～50cm、深さ28～90cmを測る。方位はＮ－17°－Ｅにとる。ＳＤ06溝に切られている。

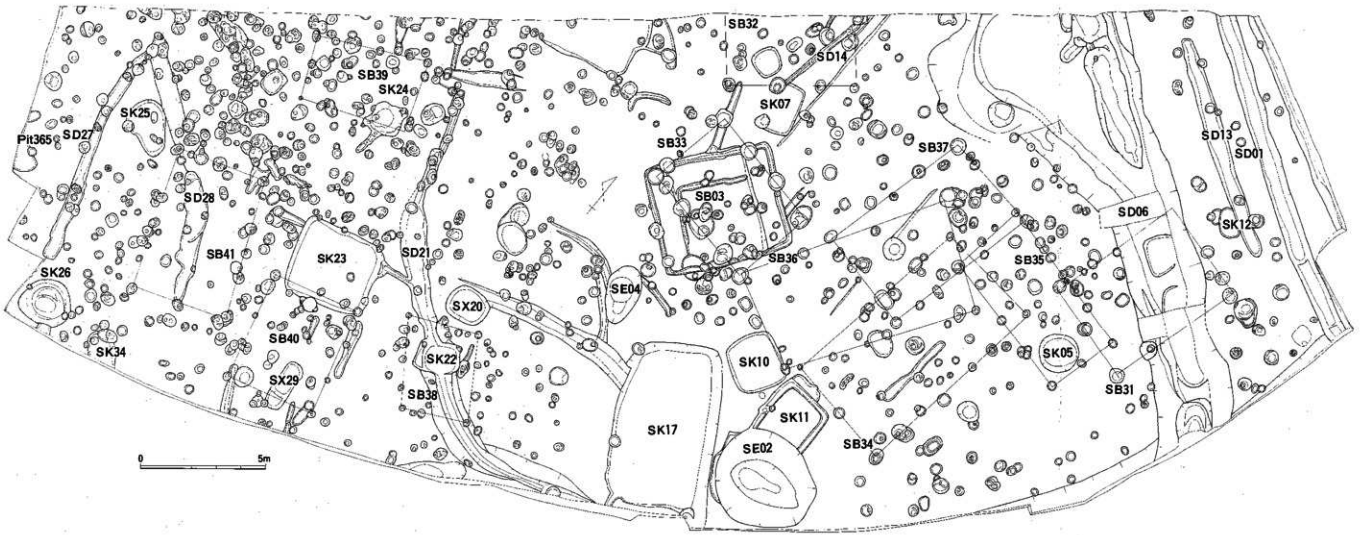
ＳＢ32（第5図）　調査区の東側で検出した。建物の北西が調査区外にのびる梁間2間、桁行3間とみられる建物である。梁間の柱間の距離1.2m、桁行の全長6.3mを測る。柱穴は円形で、径28～55cm、深さ20～48cmを測る。方位はＮ－12°－Ｅにとる。

ＳＢ33（第5図）　調査区の東側で検出した。梁間1間、桁行3間の東西棟である。梁間の全長4.1m、桁行の全長6.2mを測る。柱穴は円形で、径20～56cm、深さ18～50cmを測る。方位はＮ－12°－Ｅにとる。

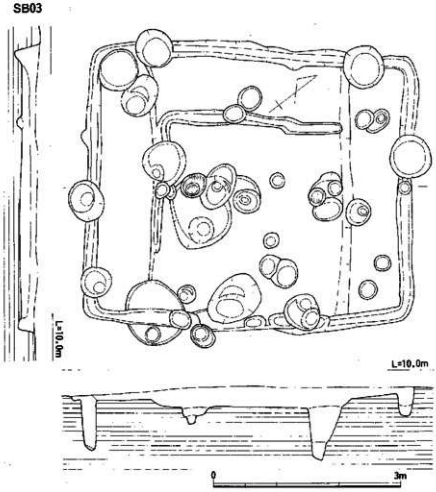
ＳＢ34（第5図）　調査区の東側で検出した。梁間2間、桁行3間の南北棟である。梁間の全長4.2m、桁行の全長8.2mを測る。柱穴は円形で、径30～52cm、深さ12～74cmを測る。方位はＮ－7°－Ｗにとる。

ＳＢ35（第5図）　調査区の東側で検出した。梁間2間、桁行3間の東西棟である。梁間の全長4.4m、桁行の全長8.6mを測る。柱穴は円形で、径32～64cm、深さ12～74cmを測る。方位はＮ－30°－Ｅにとる。

ＳＢ36（第5図）　調査区の北側で検出した。梁間2間、桁行3間の建物である。梁間の全長2.8m、桁行の全長5.1mを測る。柱穴は円形で、径32～54cm、深さ12～50cmを測る。方位はＮ－58°－Ｅにとる。



第３図　五十川遺跡群第３次調査遺構配置図



第４図　竪穴住居跡実測図

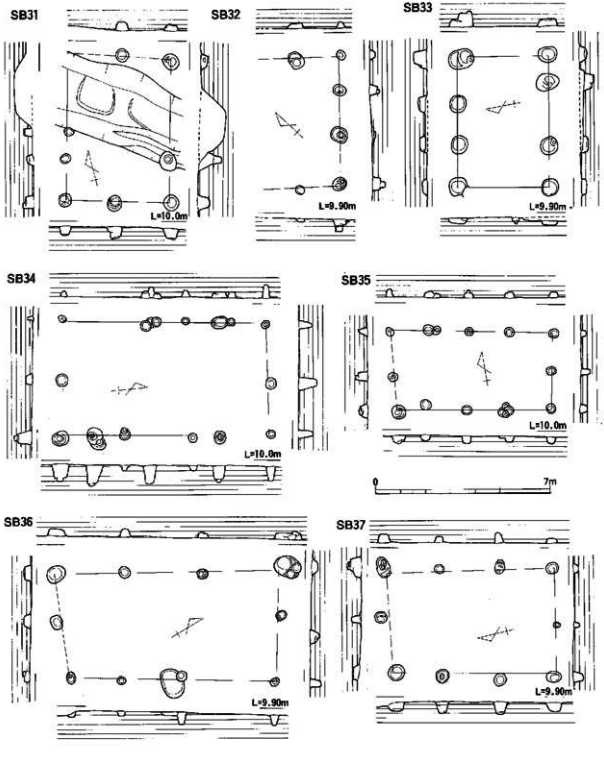
ＳＢ37（第５図）　調査区の北東で検出した。梁間１間、桁行３間の南北棟である。梁間の全長3.5m、桁行の全長5.1mを測る。柱穴は円形で、径58～72cm、深さ18～62cmを測る。方位はＮ－10°－Ｅにとる。

ＳＢ38（第６図）　調査区の南側で検出した。梁間２間、桁行３間の南北棟である。梁間の全長4.1m、桁行の全長5.4mを測る。柱穴は円形で、径30～56cm、深さ８-120cmを測る。方位はＮ－35°－　にとる。ＳＤ21溝と重複して検出されたが、ＳＤ21の埋土に掘り込まれた柱穴が識別できなかった可能性もあるので、ＳＤ21との先後関係は不明である。

ＳＢ39（第６図）　調査区の西側で検出した。梁間２間、桁行３間の東西棟である。梁間の全長4.1m、桁行の全長6.2mを測る。柱穴は円形で、径30～54cm、深さ14～94cmを測る。方位はＮ－22°－Ｗにとる。ＳＫ24土壙と重複して検出された.

ＳＢ40（第６図）　調査区の西側で検出した。梁間２間、桁行３間の南北棟である。梁間の全長5.5m、桁行の全長6.2mを測る。柱穴は円形で、径30～54cm、深さ８～90cmを測る。方位はＮ－14°－Ｗにとる。

ＳＢ41（第６図）　調査区の西側で検出した。梁間２間、桁行３間の南北棟である。梁間の全長3.8m、桁行の全長5.8mを測る。柱穴は円形で、径44～50cm、深さ36-134cmを測る。方位はＮ－34°－Ｗに

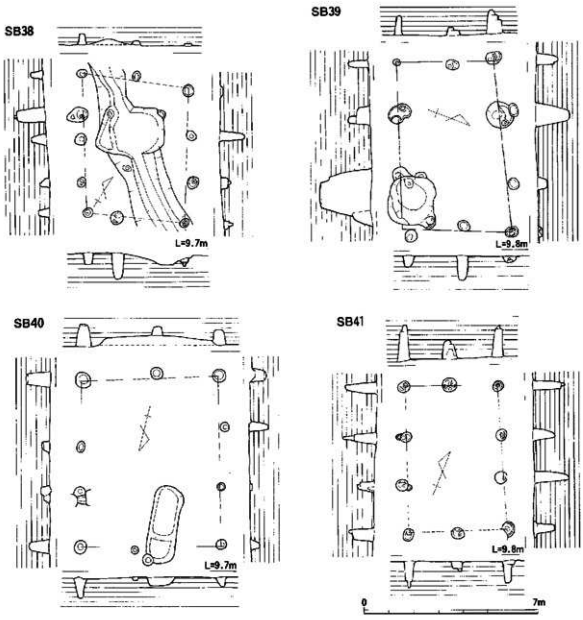


第５図　掘立柱建物実測図(1)

とる。

井戸

ＳＥ02（第７図、図版３）　調査区の南側中央で検出した。平面形は不整円形を呈し、径3.3～4.2ｍを測る。底面は八女粘土層まで掘り下げられている。壁は斜めに立ち上がり、中位から上位にかけて



第6図　掘立柱建物実測図(2)

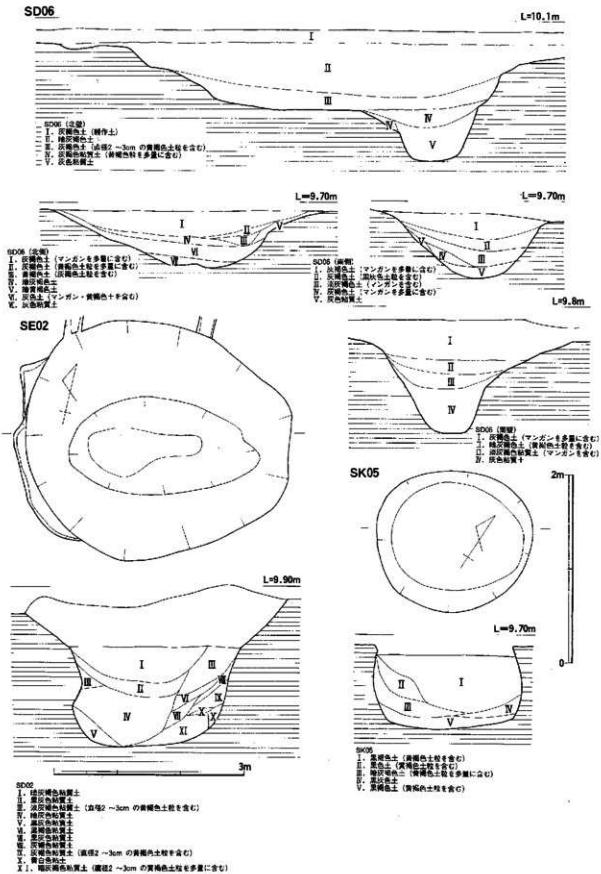
傾斜が緩くなる。深さ2.4m、底面の標高7.4mを測る。井戸枠およびその痕跡は検出されなかった。

ＳＥ04（第8図、図版3）　調査区の中央部で検出した。井戸枠およびその痕跡は検出されなかった。平面形は不整楕円形を呈するが、南半部は井戸枠を取り去る際の掘り込みで、本来は円形であった可能性が考えられる。径1.3～2.3m、深さ5.2mを測る。底面は八女粘土層まで掘り下げられている。壁はほぼ直に立ち上がる。底面の標高5.5mを測る。

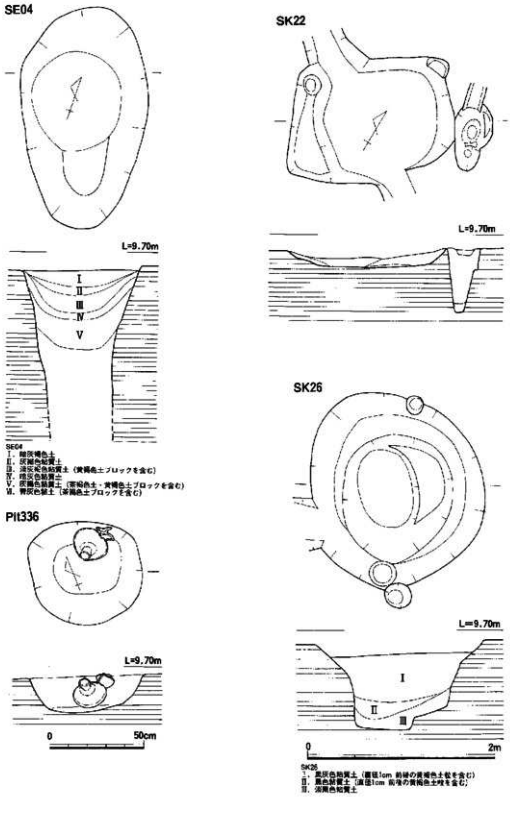
土壙

ＳＫ05（第7図、図版5）　調査区の東側で検出した。貯蔵穴とみられる。平面形は円形を呈し、壁は若干袋状に立ち上がる。径1.5～1.6m、残存する深さ0.7mを測る。

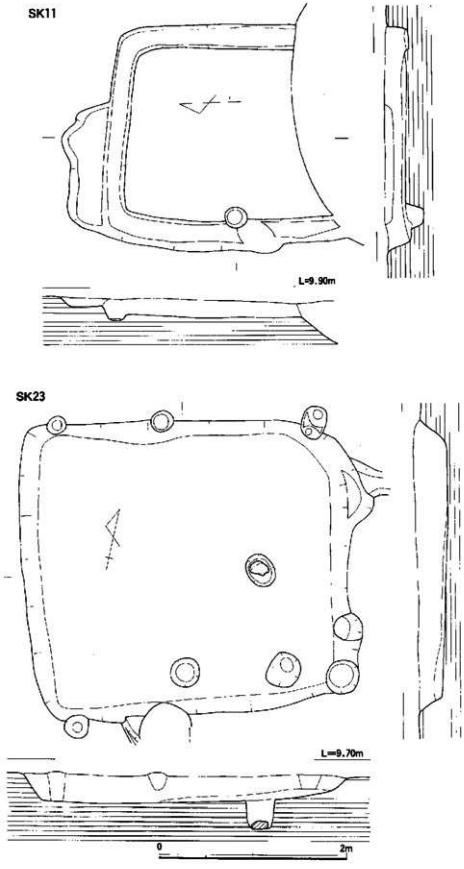
Pit336（第8図、図版6）　調査区の北側中央で検出した。平面形は不整円形を呈し、径54～60cm、深さ18cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。土師器高杯・脚台付鉢が底面から10cm浮いた状態で出土し



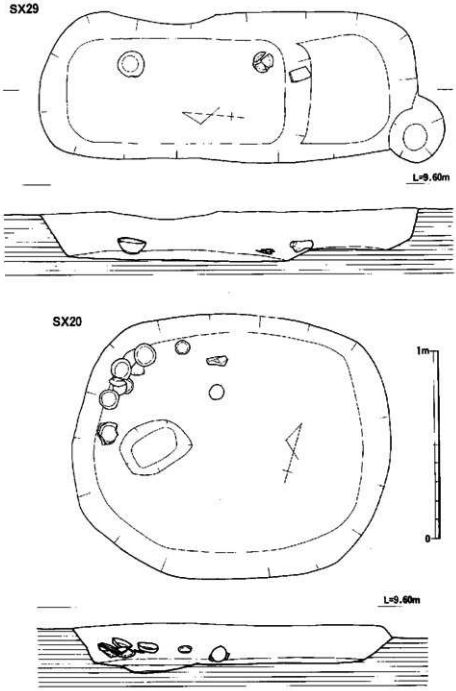
第７図　溝・井戸・貯蔵穴実測図



第８図　溝・井戸・貯蔵穴実測図



第9図　貯蔵穴実測図



第10図　土壙墓実測図

た。

ＳＫ22（第８図、図版７）　調査区の中央で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.7m、幅1.3m、深さは中央部で18cmを測る。ＳＤ21溝と重複して検出されたが、互いの埋土に掘り込まれ

た遺構埋土の色調の違いが識別できず、ＳＤ21との先後関係は不明である。方位はＮ－30°－Ｗにとる。ＳＸ20土壙墓と主軸を同じくし並列関係にあることから、土壙墓の可能性もある。

ＳＫ26（第８図、図版５）　調査区の南端で検出した。平面形は不整円形を呈し、径 1.8～2.0ｍ、深さは中央部で0.9ｍを測る。壁は斜めに立ち上がり、中位から上位にかけて傾斜が緩くなる。

ＳＫ11（第９図、図版６）　調査区の南側中央で検出した。ＳＥ02井戸と重複して検出されたが、ＳＥ02の埋土上面で遺構の掘り込みは検出できなかった。平面形は隅丸長方形を呈し、残存長2.4ｍ、幅2.1ｍ、深さ25㎝を測る。壁はほぼ直に立ち上がる。幅0.2ｍ、深さ20㎝の壁溝が三方にめぐる。ほぼ南北に方位を取る。

ＳＫ23（第９図、図版７）　調査区中央のやや南西で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長3.5ｍ、幅3.1ｍ、深さは中央で28㎝を測る。壁は斜めに立ち上がる。床面および四隅の柱穴はこの遺構に伴うものであろう。方位はＮ－14°－Ｗにとる。

土壙墓

ＳＸ29（第10、図版８）　調査区の南側で検出した。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、全長2.0ｍ、幅75㎝、深さ25㎝を測る。壁は斜めに立ち上がり、墓壙の南側が一段高くテラス状に掘られている。墓壙の北東で越州窯系青磁碗１、中央のやや南東で土師器小皿の蓋と身の一揃い、砥石１が底面より約５cm浮いた状態で出土した。ほぼ南北に方位を取る。

ＳＸ20（第10図、図版７）　調査区の中央、ＳＫ22土壙の北1.0ｍで検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.7ｍ、幅1.4ｍ、深さは中央部で21㎝を測る。壁は斜めに立ち上がる。墓壙の北東で土師器小皿２・杯６が底面より約５㎝浮いた状態で出土した。方位はＮ－16°－Ｗにとる。

溝

ＳＤ06（第７図、図版４）　調査区の北東で検出した矩形にめぐる溝である。方位はＮ－44°－Ｗにとる。幅2.6～6.0ｍ、深さは1.0～1.8ｍを測る。調査区域内では延長18ｍ検出した。底面は南東から北西へ浅くなっている。溝の断面形は逆台形を呈する。

2　出土遺物

ＳＥ02出土遺物（第11～14図、図版8～15）

須恵器

皿（１）　底部はヘラ切離しにより、体部は横ナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径16.0㎝、器高 2.0㎝、底径11.6㎝を測る。

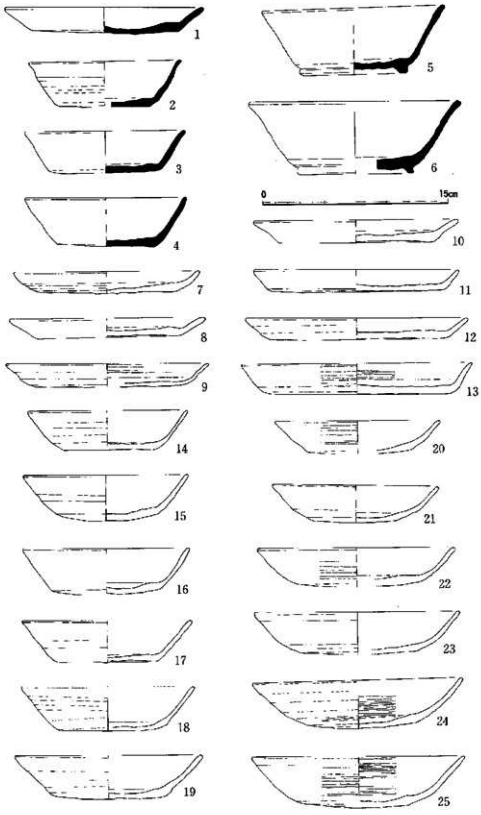
杯（２～４）　ほぼ同形同大で、口縁部の反りに若干の違いがみられる。口径12.2～13.0㎝、器高3.2～3.9㎝、底径7.2～9.1㎝を測る。

椀（５・６）　５の体部は横ナデ、高台は低く断面逆台形を呈し、底部端に貼付される。６は体部外面下位が回転ヘラ削りされ、高台は外側にやや開く。

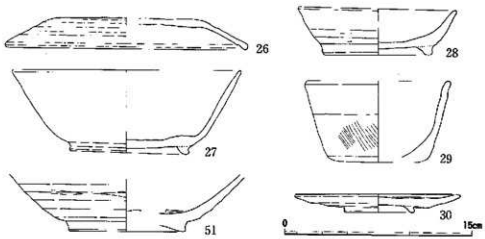
土師器

皿（７～13）　底部はヘラ切離しにより、調整は７・８・10～12の器表が磨滅していて不明であるが、他は内外面に横ナデを施した後、ヘラ磨きされる。口径14.8～18.4㎝、器高 1.5～ 2.5㎝、底径10.4～14.3㎝を測る。

杯（14～25）　法量から14～21と22～25とに大別される。いずれも底部はヘラ切離し、20は体部を横ナデ調整した後にヘラ磨き、他は横ナデ、14・18～21は体部外面下位が回転ヘラ削りされる。14～21



第11図　SE02出土遺物実測図(1)



第12図　SE02出土遺物実測図(2)

の口径12.8～15.0cm、器高2.6～3.7cm、底径6.5～ 8.7cmを測る。大型の22～25の体部は内湾して立ち上がり、内外面に横ナデを施した後、ヘラ磨きされる。体部外面下位は回転ヘラ削りされる。口径15.8～17.1cm、器高3.1～4.2cm、底径7.9～9.6cmを測る。

杯蓋（26）　器表の磨滅が著しいが、天井部をヘラ削りし、体部に横ナデを施した後、ヘラ磨きされていたとみられる。天井部につまみは付かない。端部は内面に浅い凹線をめぐらし、丸くおさめられている。

椀（27）　口径・色調からみて杯蓋26と組をなすとみられる。同様に器表の磨滅が著しく、体部は内外とも横ナデの後、ヘラ磨きと思われる。底部端に貼付された高台は、丸味を持ち外側にやや開く。

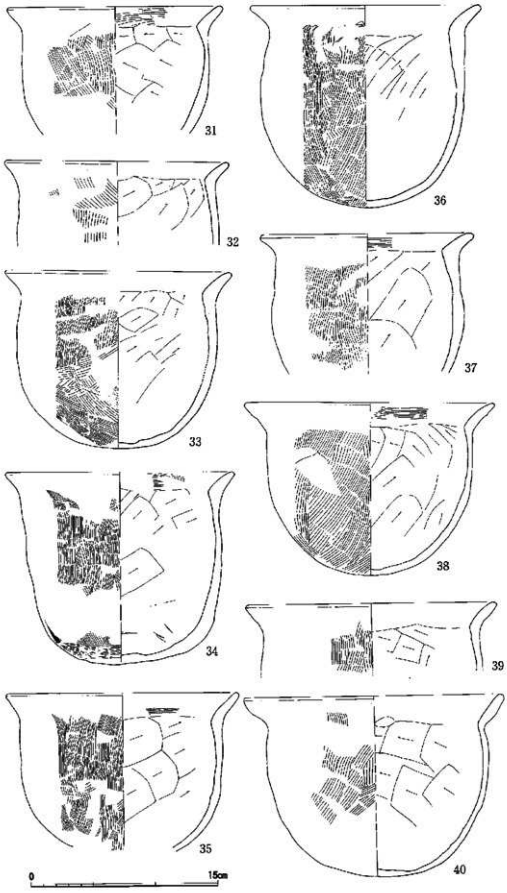
杯（28・29）　28の体部は横ナデ、体部外面下位が回転ヘラ削りされる。高台は低く断面逆台形を呈し、底部端に貼付され、外側にやや開く。29は口径に比して器高が高い。体部外面の上位から内面にかけて横ナデ、体部外面下位は刷毛目、内底はナデ調整される。

皿（30）　内底と体部の境に部分的に直線的な稜がみられることから、高台付の耳皿の可能性が考えられる。高台は低く外側に開く。

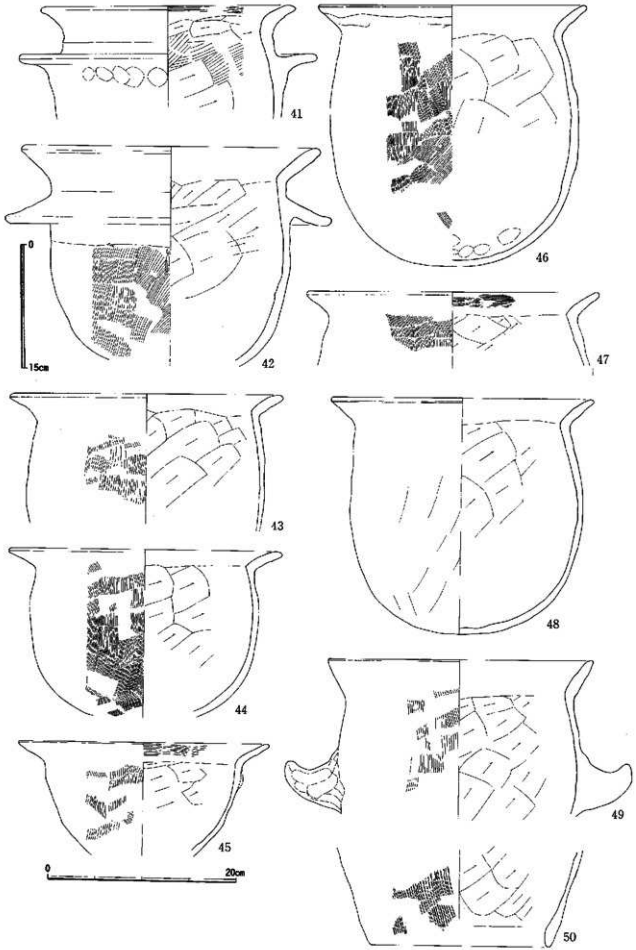
甕（31～44・46～49）　いずれも胴部の張りが弱く、口径が胴部最大径を上回る。胎土には砂粒を多量に含む。31～40は小型の甕で、31・33・35～38・40は球形の胴部に、32・34はほぼ直立する胴部に外反するくの字口縁をもつ。口縁部内面は横ナデ、もしくは横方向の刷毛目の後横方向にナデ消し、外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りしている。41・42は口縁下外面に箆をめぐらす羽釜形の甕である。外面には煤が多量に付着している。43・44・46～48はやや大型の甕である。43・44・46・47は口縁部内面は横ナデ、もしくは横方向の刷毛目の後横方向にナデ消し、外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りしている。46の底部付近には指頭圧痕を残す。48の口縁部は内外面ともに横ナデで、端部は鋭い。胴部外面はヘラ状工具によるナデ、内面はヘラ削りしている。49は把手付甕で、胴部の張りから甑とも考えられる。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面はヘラ状工具によるナデ、内面はヘラ削り、把手部は指頭によるナデを施す。

鉢（45）　大型の深めの鉢である。口縁部内面は横方向の刷毛目の後横方向にナデ消し、外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りしている。口縁下外面に把手欠失の痕がある。

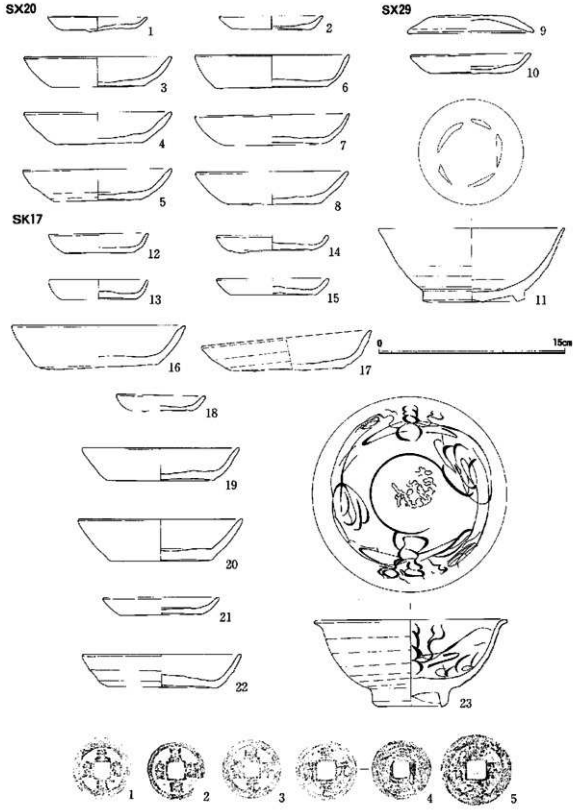
甑（50）　底部付近ですぼまった体部下半片で、底部付近は横ナデ、体部外面は刷毛目、内面はヘラ削りされる。



第13図　SE02出土遺物実測図(3)

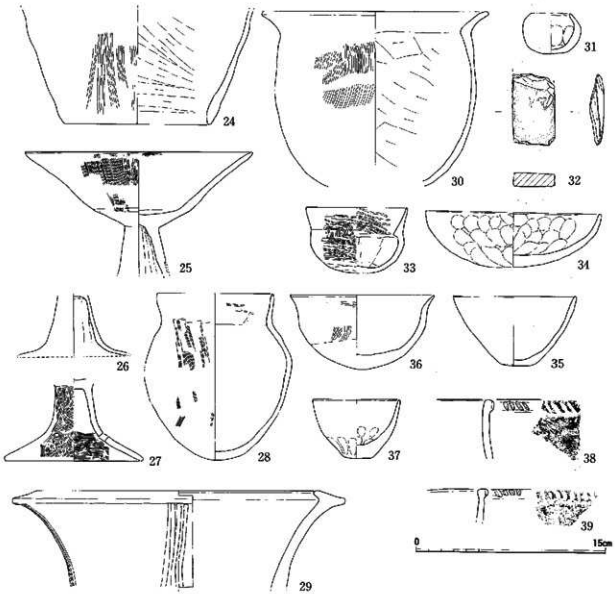


第14図　SE02出土遺物実測図(4)



第15図　土壙・柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図(1)

越州窯系青磁碗（51）　祖製のⅡ-2類で、底部は上げ底の円盤状を呈し、内底に目跡がある。
ＳＸ20出土土器（第15図、図版16）



第16図　土壙・柱穴・ピット状遺構出土遺物実測図(2)

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（1～2）　口径8.0・8.4cm、器高1.2・1.1cm、底径5.8・6.0cmを測る。

杯（3～8）　口径10.8～12.4cm、器高2.4～2.6cm、底径6.9～8.9cmを測る。

SX29出土遺物（第15図、図版11）

土師器

小皿蓋（9）　天井部外面はヘラ削り、体部および天井部内面は横ナデされる。口縁端部内面に浅い凹線をめぐらす。口径10.1cm、器高1.5cm、天井部径6.6cmを測る。

小皿（10）　底部はヘラ切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.7cm、器高1.5cm、底径6.6cmを測る。

越州窯系青磁碗（11）　精製品、輪状高台の碗Ⅰ-2類である。体部は丸みを持ち、口縁部はやや外反し、端部は細くおさめられている。断面逆台形の高台端部は外側に跳ね、体部外面下半が回転ヘラ

削りされる。灰色を帯びたオリーブ色の釉が全面にかけられ、畳付の釉はカキ取られ露胎となっている。内底見込みに目跡を有する。

ＳＫ17出土土器（第15・16図、図版16・18）

土師器　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（12～15）　口径8.0～9.0cm、器高1.2～1.6cm、底径5.6～6.6cmを測る。

杯（16）　口径13.8cm、器高3.3cm、底径9.2cmを測る。

磨製石斧（32）　未製品で、石材は粘板岩である。

ＳＫ23出土土器（第15図、図版17）

土師器杯（17）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径13.8cm、器高2.6cm、底径8.2cmを測る。

Ｓ　19出土土器（第15図、図版17）

土師器小皿（18）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.2cm、器高1.3cm、底径4.8cmを測る。

ピット状遺構、柱穴出土器（第15図、図版17）

土師器　いずれも底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。（20の体部については磨滅により詳細不明。）

小皿（21）　口径9.3cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測る。Pit512出土。

杯（19・20・22）　19は口径12.6cm、器高2.6cm、底径8.6cmを測る。Pit110出土。20は口径13.2cm、器高3.3cm、底径8.2cmを測る。Pit140出土。22は口径12.8cm、器高2.6cm、底径8.8cmを測る。Pit535出土。

龍泉窯系青磁碗（23）　口縁部が外反し、釉は高台内面の途中までかかる。体部内面に蓮華文の片彫り、内底見込みには花文のスタンプが粗雑に施される。Pit365出土。

ＳＤ06出土土器（第16図、図版17）

土師器甕（24）　底部付近ですぼまった体部下半の破片で、底部付近は横ナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラ削りされる。

Pit336出土土器（第16図、図版18）　土師器高杯、脚台付鉢が出土した。

土師器高杯（25）　杯底部にある反転部の段は明瞭である。杯部外面は刷毛目で部分的に横方向にナデ消されている。杯底から脚部にかけてはヘラ磨きが施されている。

ＳＫ24出土土器（第16図、図版18）

土師器高杯（26・27）　いずれも脚部片で、26は裾部が屈曲して開き底部となる。27の屈曲は不明瞭である。

ＳＢ33出土土器（第16図、図版18）

弥生土器甕（28）　卵形の胴部から直立気味に口縁がのびる。外面は二次焼成を受け、器面がもろく調整痕は不明瞭である。口縁部内面、胴部外面にわずかに刷毛目痕が認められる。

ＳＫ05出土土器（第16図、図版18）

弥生土器壺（29）　鍛形口縁の広口壺で、外面には暗文が施されている。

ＳＫ26出土土器（第16図、図版17・18）

土師器甕（30）　口縁部付近を横ナデ、体部外面を刷毛目、内面はヘラ削りされる。

ミニチュア土器（31）　手づくねで、内面に指頭圧痕が残り、外面はナデ調整されている。

ＳＢ03出土土器（第16図、図版18）

弥生土器鉢（34・35）　34は手づくねの鉢で、口縁端部には横ナデを施す。35は器表が磨滅しているため、調整の詳細は不明である。底部はわずかに丸みをもつ。

ＳＫ05出土土器（第16図、図版18）

甕形土器（38・39）　口縁部外面に刻み目突帯を一条有する甕の破片である。内外面ともにナデを施す。

土師器小型丸底壺（33）　直立気味の口縁に口径より小さい球形の胴部が付く。口縁部および胴部外面の中位以上は横方向のヘラ磨き、頸部には刷毛目痕が残る。胴部内面は板状工具による横ナデ、外底部はヘラ削りされる。

土師器小型鉢（36）　半球形の胴部から短く外反する口縁がのびる。口縁部は横ナデ、胴部外面は刷毛目の後、ナデ消しを施している。外底には黒斑がみられる。

弥生土器鉢（37）　手づくねの鉢で、Pit157出土。

金属製品（図版11）　ＳＥ02から出土した。

鉄製刺器（52）　基部は屈曲し、刃部のほとんどは欠失している。

銅鏡（53）　直径２㎝前後、厚さ１㎜の鏡片で、花弁文が鋳出されている。

銅銭（第15図）　いずれもＳＥ04から出土した。１は天聖通寶、２は皇宋通寶、３は咸平元寶である。４は景定元寶で背左上に斜線を持つ。５は淳熙元寶か。１～３が北宋銭、４・５は南宋銭である

Ⅴ　小　　結

今回の調査で検出した遺構の時期は中世後半、11世紀前半、８世紀後半、古墳時代前期、弥生時代中期後半に大別される。中世後半の土壙ＳＫ17、土壙墓ＳＸ20出土土師器の法量から、その年代は14世紀後半と推測され、他の柱穴からもそれらに近い法量の土師器が出土している。調査区の北西では柱穴が特に密集しており、建物としてまとめきれなかったものが多く存在する。まとめきれなかった柱穴についても柱列を単位としてみていくと、柱筋は真北に近い主軸の方位をとる掘立柱建物ＳＢ39～41、土壙ＳＫ17・23、溝ＳＤ21・27と向きを同じくするものが多い。建物は集落遺跡で一般的な２間×３間規模のものを標準的なものとして復元したが、さらに大規模な建物やＬ字形・凸形等の変則的な建物も想定されよう。調査区南東部では東偏10°前後の方位をとる建物ＳＢ33～35・37の一群が検出された。溝ＳＤ06はそれらの建物とほぼ同時期とみられる（図示した８世紀後半代の遺物は流れ込み）。

前述の通り、本調査区周辺は中世後半に大規模な造成を受けている。中世後半の柱穴の中には深さ１mを越えるものがあり、掘り上げに多大な労力を費やした。その廃絶後は大きな造成はなされなかったようである。それより前の遺構は削平の度合いが少ない台地縁辺に近い調査区の東北部に限られた。土壙墓ＳＸ29は11世紀前半唯一の遺構である。北部九州で輸入陶磁器が供献されようになるのは11世紀後半以降であり、11世紀前半の土壙墓、木棺墓に供献される碗といえば土師器もしくは黒色土器であることから、非常に稀少な発掘事例である。また、共伴の土師器小皿は合わせ口の状態で供献されていた。上位にあった土師器の口縁端部内面には浅い凹線がめぐらされ、以前から同時期の遺構で散見される同型式の土師器については蓋との指摘がなされていたが、それを裏付けるものである。

８世紀後半の遺構では井戸ＳＥ02、土壙ＳＫ26が残存していたが、ＳＥ02からは土師器、なかでも甕がまとまった数出土した。皿・杯から大宰府史跡第43次調査ＳＥ1081、ＳＫ1084出土土器と同時期(註1)

とみられ、集落遺跡から散発的に出土している甕の変遷を追う上で、良好な一括資料である。

古墳時代前期では北西部で土壙ＳＫ24、Pit336がみられた。弥生時代後期では竪穴住居跡ＳＢ03、掘立柱建物ＳＢ33が中央部で検出されたが、ＳＢ03の壁の残存高は20㎝と後世の削平の度合いを示している。同時期の柱穴・ピット状遺構もみられ、何棟かの竪穴住居跡の壁が後世に削平されたものと推測される。弥生時代中期後半の土壙ＳＫ05はその形状から貯蔵穴とみられる。残存する深さ0.7ｍと他時期の遺構同様削平が著しい。

註

註１　九州歴史資料館『大宰府史跡－昭和51年度発掘調査概報－』1977

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
SE02			
須恵器 皿			
20	16.0	2.0	11.6
須恵器 杯			
16	12.2	7.2	3.2
27	(13.0)	3.4	9.1
19	12.8	3.9	7.8
須恵器 椀			
21	(14.7)	8.7	5.2
22	(17.0)	5.8	(9.4)
土師器 皿			
30	(14.8)	1.7	(10.4)
9	17.8	1.5	11.5
14	(16.2)	1.9	(14.0)
13	(16.5)	1.8	(12.4)
10	(16.4)	1.8	(13.8)
12	17.9	1.8	14.2
11	18.4	2.5	14.3
土師器 杯			
2	12.8	3.2	7.2
3	13.2	3.7	8.0
4	13.4	3.7	8.7
18	(13.6)	3.3	(8.0)
1	13.8	3.5	8.6
6	15.0	3.5	8.6
15	13.2	2.6	8.4
5	13.5	3.0	6.5

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
17	(15.8)	3.1	9.6
須恵器 皿			
51	(16.4)	3.4	9.4
7	16.8	3.9	8.6
8	17.1	4.2	7.9
土師器 杯蓋			
25	(19.2)	2.5	(12.0)
土師器 椀			
28	(11.6)	6.5	7.0
土師器 杯			
24	(18.2)	6.6	(9.4)
土師器 皿			
26	(12.6)	3.6	8.8
土師器 皿			
30	(14.8)	1.7	(10.4)
SX20			
土師器 小皿			
40	8.0	1.2	5.8
41	8.4	1.1	6.0
土師器 杯			
37	10.8	2.4	7.3
34	11.8	2.5	7.0
39	12.0	2.5	6.9
36	12.3	2.6	7.5
35	12.4	2.4	7.7
38	12.4	2.5	8.9
SK17			
土師器 小皿			
42	(8.0)	1.5	(5.6)

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
43	(8.0)	1.6	(6.0)
45	(9.0)	1.2	6.6
44	(9.0)	1.3	(6.8)
土師器 杯			
46	(13.8)	3.3	9.2
SK23			
土師器 杯			
49	(13.8)	2.6	8.2
SX29			
土師器 小皿			
31	10.1	1.4	6.5
土師器 小皿			
32	9.6	1.5	6.3
SK19			
土師器 小皿			
52	7.2	1.3	4.8
Pit110			
土師器 杯			
47	12.6	2.6	8.6
Pit140			
土師器 杯			
50	(13.2)	3.3	8.2
Pit512			
土師器 小皿			
53	9.3	1.4	6.4
Pit535			
土師器 杯			
48	(12.8)	2.6	8.8

(括弧内の数値は復元値)

第1表 出土土器計測表

図　　版

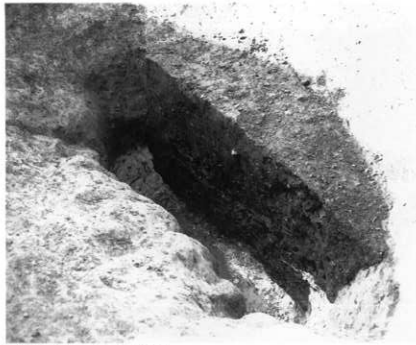
(1) 五十川遺跡群第３次調査中央（南東から）

(2) 五十川遺跡群第３次調査区東側（南から）

図版2

(1) 五十川遺跡群3次調査区中央（西から）

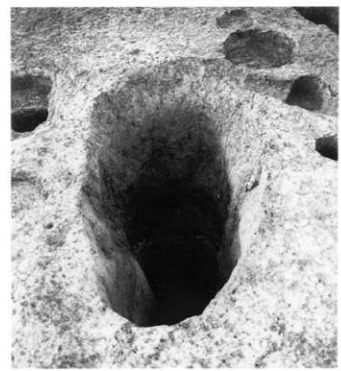
(1) 五十川遺跡群3次調査区西側（東から）



(1) SE02井戸土層（南から）

(2) SE02井戸（北から）

(3) SE02井戸（東から）



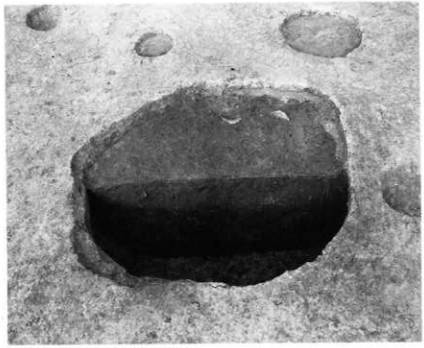
(4) SE04井戸（南東から）

(1) SD06溝土層1（南東から）

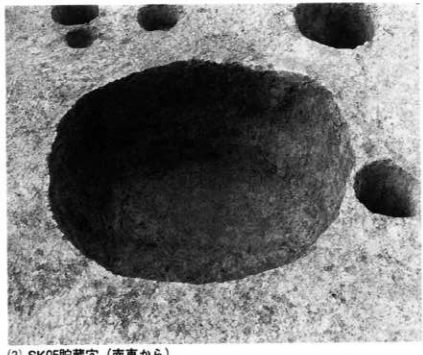
(2) SD06溝土層2（南東から）

(3) SD06溝北壁面（南東から）

(4) SD06溝南壁面（北西から）



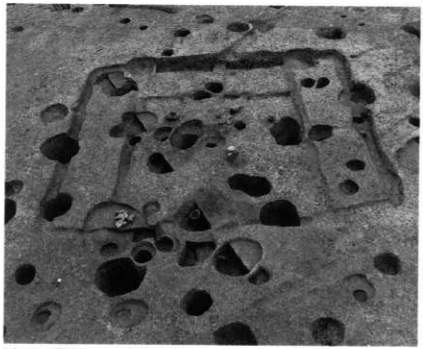
(1) SK05貯蔵穴土層（南東から）



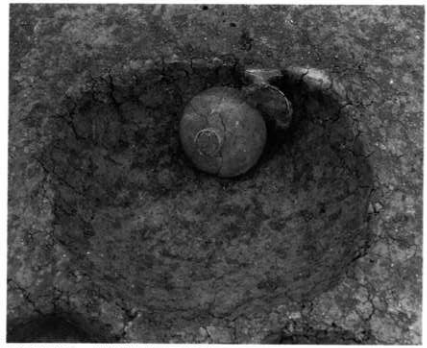
(2) SK05貯蔵穴（南東から）

(3) SK26土壙土層（東から）

(4) SK26土壙（東から）



(1) SB03竪穴住居跡（南東から）



(3) Pit336ピット状遺構（南西から）

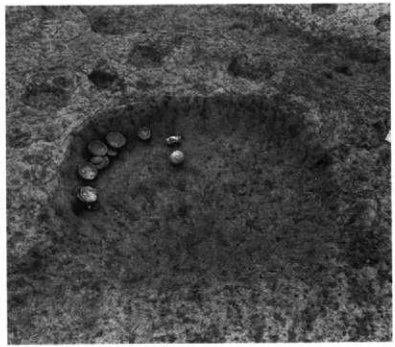
(2) SK10土壙（西から）

(3) Pit365遺物出土状況（東から）

(1) SX22土壙墓（西から）

(2) SK23土壙（南から）

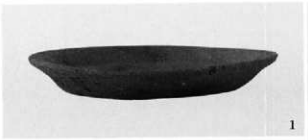
(3) SX20土壙墓（北東から）



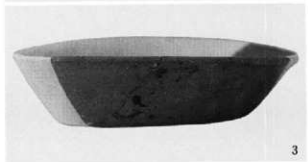
(4) SX20土壙墓（南東から）

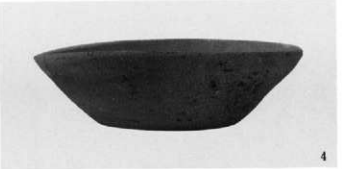
(1) SX29土壙墓（南から）

(2) SX29土壙墓（西から）


1

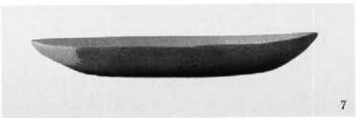
2


3


4

5

6


7

8

9

10

11

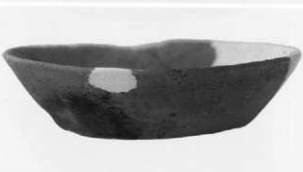
12

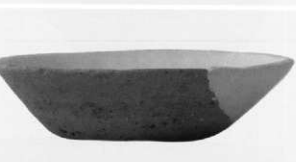
13

SE02出土遺物(1)

14

15


16


17

18

19

20

21

22

23

24

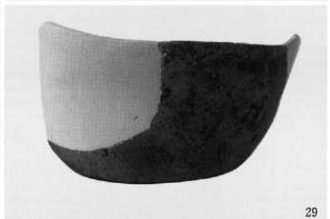
25

SE02出土遺物(2)

26

28

27


29

51

30

52

53

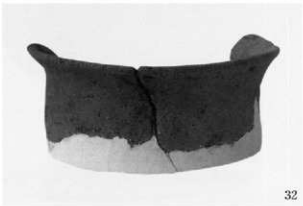
SE02出土遺物(3)

9

11

SX29出土遺物

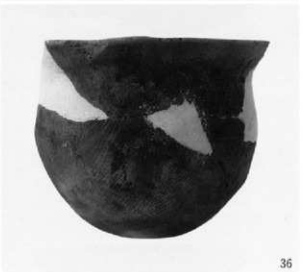
31


32

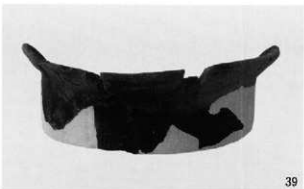
33

34

35


36

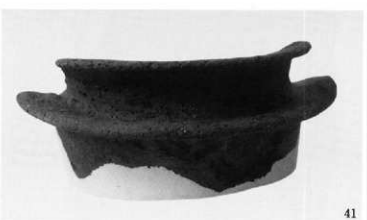
SE02出土遺物(4)


39

36

38

37


41

42

SE02出土遺物(5)

43

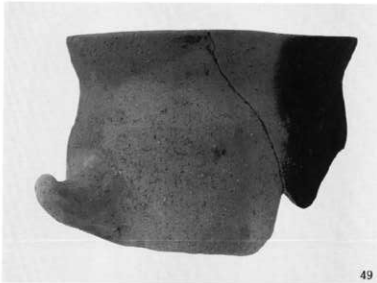
45

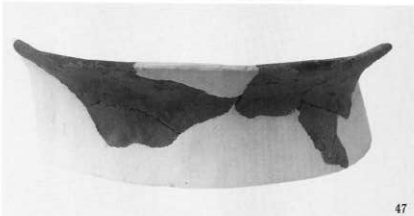
44

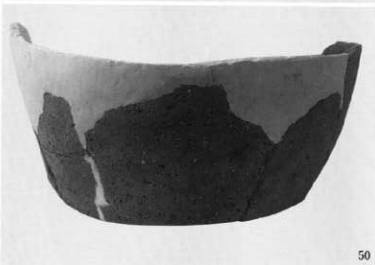
46

SE02出土遺物(6)

48


49


47


50

SE02出土遺物(7)

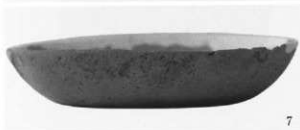
1

2

3

6

4


7

5

8

12

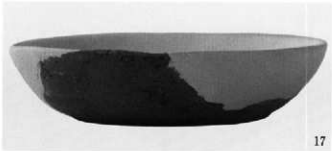
14

13

15

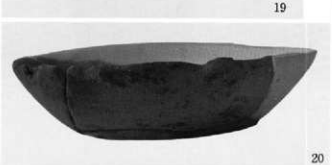
16

SX22・SK17出土遺物


17

18

19


20

21

22

23

24

その他の遺構出土遺物(1)

図版18

25

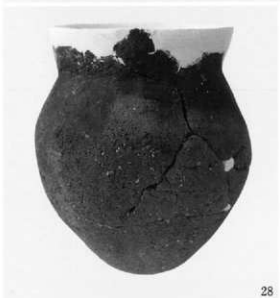
36

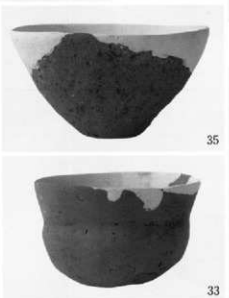
34

26 27

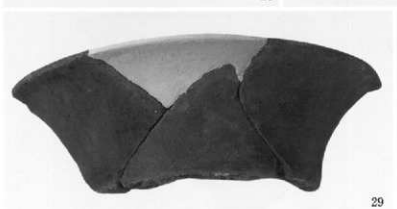
31

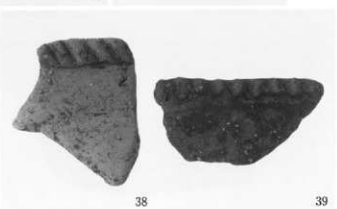
37


28


35 33

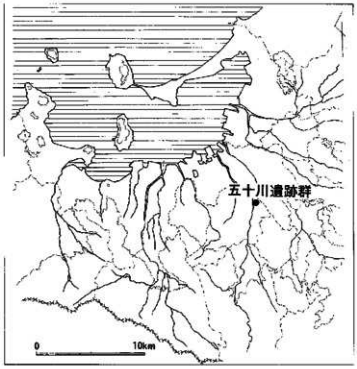
32


29


38 39

その他の遺構出土遺物(2)

五十川（ごじっかわ）遺跡群第４次調査



遺跡略号　GKJ－４
遺跡調査番号　9704

例　言

1．本書は南区五十川２丁目248他における共同住宅新築に伴い、福岡市教育委員会が平成９年度（1997年度）に実施した五十川遺跡群第４次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測は長家伸が行った。
3．遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
4．製図は長家、山野妙子が行った。
5．遺構写真は長家が撮影した。
6．遺物写真は長家が撮影した。
7．遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は井戸（ＳＥ）・土坑（ＳＫ）・竪穴（ＳＣ）・溝（ＳＤ）・ピット（ＳＰ）である。
8．遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
9．本書で用いる方位は磁北であり、真北から６°21′西偏する。
10．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用いただきたい。
11．本書の執筆・編集は長家があたった。

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経過

平成９年１月７日付けで住友石炭鉱業株式会社取締役社長白瀬雄次氏より建築局開発指導課宛に南区五十川２丁目110番４・110番５・248番の物件（1,823㎡）に関しての開発事前審査願が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である五十川遺跡群に含まれており、その敷地の一部については平成７年度に発掘調査が行われている（第３次調査：前章報告分）所であった。このため埋蔵文化財課ではこの旨を通知し、埋蔵文化財の取扱について協議を行った（事前審査番号8-2-445）。

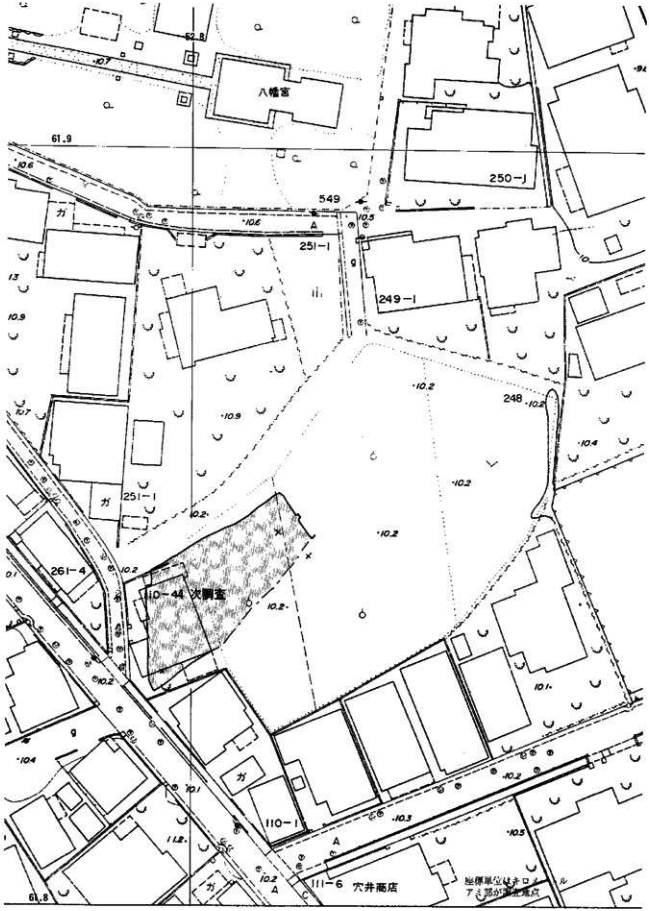
協議の結果共同住宅建設予定地については遺構の破壊が避けられないため、平成７年度に調査を行った905㎡を除外した約300㎡を対象として発掘調査を行い記録保存を図ることとした。また北側の駐車場予定地については工事掘削を伴わず遺構が破壊されないため盛土保存とする事で協議が成立した。これを受けて平成９年４月１日付けで福市教埋8-2-445号で株式会社高木工務店代表取締役高木哲夫氏より埋蔵文化財発掘調査願いが提出され、両者の間で委託契約を締結し発掘調査・資料整理を行うこととした。

発掘調査は平成９年４月８日～平成９年５月６日の期間で行った。調査面積は285㎡で、遺物はコンテナ９箱分出土している。

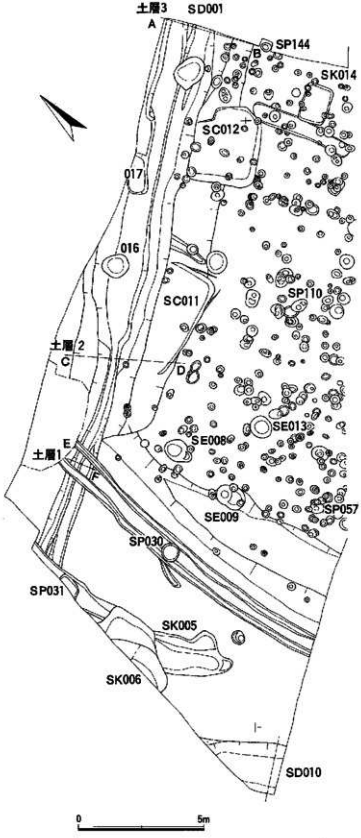
現地での発掘調査に当たっては、事業主体である高木工務店及び地元五十川２丁目の皆様には調査についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2．調査体制

事業主体　株式会社高木工務店
調査主体　教育委員会埋蔵文化財課
調査統括　埋蔵文化財課長　荒巻輝勝　第２係長　山口譲治
調査庶務　第１係　西田結香
調査担当　第２係　長家伸
調査作業　柳瀬伸　脇田栄　寺園恵美子　小川博　村本義夫　安元尚子　小路丸嘉人　平木恵子
整理作業　永田優子　指原始了　花田則子　池聖子　吉村智子　小池温子　増田ゆかり　草場恵子　小路丸良江　山野妙子　今林加津江　中村幸子



第1図　調査区位置図(1/500)


土層3
SD001
A
B
SP144
SK014
SC012
017
016
SC011
SP110
土層2
C
D
SE013
SE008
E
土層1
F
SE009
SP057
SP030
SP031
SK005
SK006
SD010
0
5m

第2図　全体図(1/150)

Ⅱ　調査の記録

1．調査概要

調査地点は御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地上に位置する。周辺の調査及び調査地点の位置については前章（第３次調査報告）の項でまとめて報告しておりここでは割愛する。対象地は宅地及び畑として利用されており、調査前は標高10ｍで整地済であった。

遺構面は鳥栖ロームの下部である。対象地東側は表土直下で標高9.8ｍであるが、西側は旧水田の影響で一段低くなっており遺構面標高は9.2ｍである。なお宅地開発以前は対象地の東半部は畑、西側の低い部分は水田として利用されていた。また対象地西側の集落を南北に走る道路部分が水路となっており、これを挟んで更に西側はまた１ｍほど高くなっていたとのことである。検出遺構は古墳時代の井戸、中世の掘立柱建物・竪穴・土坑・溝・ピット等である。中世の遺構はピットも50㎝以上残存しているものが多く遺存状況は非常に良好であるのに比べ、それ以前の遺構は古墳時代の井戸のみである。中世の溝から土師器・須恵器の出土もみられ、古墳時代には少なくとも集落が形成されていたようであるが、中世段階で大規模な整地が行われたと考えられ、この際にこれ以前の遺構については大きく削平されたものと考えられる。なお本章の報告では掘立柱建物については第３次調査と併せて考える必要があり、第３次調査報告分で一括報告し、本章では割愛する。

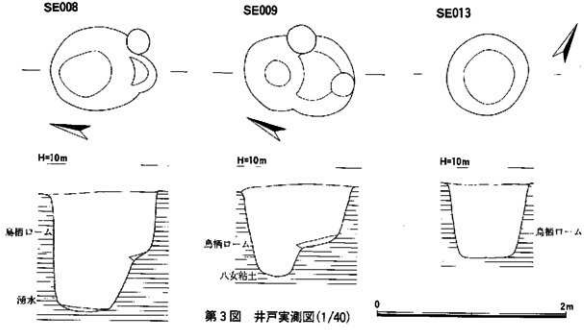
2．遺構と遺物

井戸（SE）

井戸は３基を調査区中央部でまとまって検出している。いずれも古墳時代前期前半に位置づけられる。またこれにともなう生活遺構は削平により欠失したものと考えられ確認できていない。

SE008（第３図）

調査区中央部で検出する。平面は1.2ｍ×0.9ｍの長円形を呈する。掘り方は南側に一段平坦面を有する２段掘りとなり、深さは1.3ｍを測る。埋土は上半が黒色土、下半はロームブロックを含んだ締まりのない褐色土で、底面にははりつくように厚さ２㎝程の粗砂が堆積している。また標高8.6ｍで



第３図　井戸実測図(1/40)

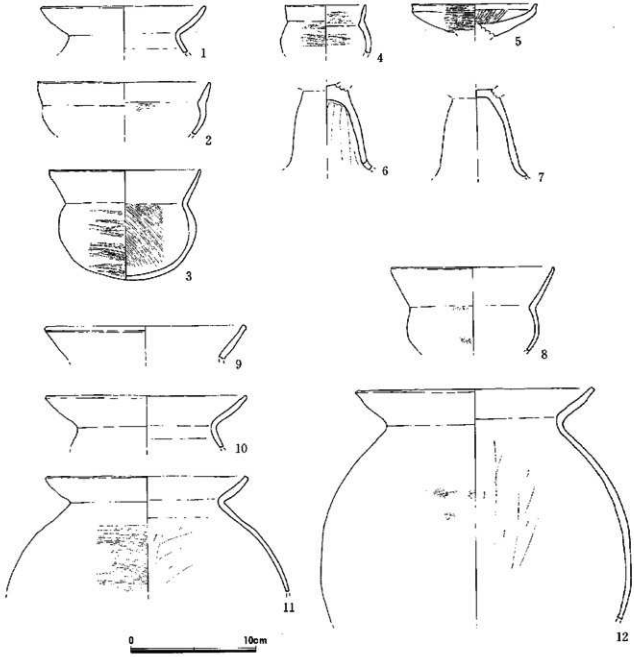
僅かに湧水がみられる。出土遺物は少量で図示し得ないが、布留式甕の破片が出土している。

SE009（第3図）

調査区中央部で検出する。平面は1.2m×0.8mの長円形を呈する。掘り方は南側に広めの平坦面を有する2段掘りとなり、検出面からの深さは1mを測る。埋土は008同様で上半が黒色土、下半が締まりのない褐色土である。遺物には土師器甕・壺・椀・器台・高坏等がある。

出土遺物（第4図1～7）

1は布留式甕の口縁部である。端部のつまみ上げは見られない。2は椀である。色調は淡赤褐色を呈する。3・4は小型の壺である。3は外面横方向のヘラミガキ、内面には刷毛目を有する。4は褐色を呈する。内外面にヘラミガキを行う。5は器台の受け部である。器面の剥落が進むが、ヘラミガ



第4図　SE009・013出土遺物実測図(1/3)

キが痕跡的に残っている。6・7は高坏の脚部である。6には穿孔が認められる。

SE013（第3図）

調査区中央部で検出する。上面径90cmの円形を呈し、深さは検出面から80cmを測る。壁はほぼまっすぐに立ち上がり、底面は平坦である。また埋土はロームブロックを少量含む黒色土である。土師器甕・壺が出土している。

出土遺物（第4図8～12）

8は小型の甕である。器面は磨耗し、淡赤褐色を呈する。9～12は布留式甕である。口縁端部の内側へのつまみ出しは見られない。9がやや外側に肥厚させるが、他は丸く納めている。11・12には外面横刷毛、内面は縦方向へのヘラ削りが残っている。

土坑（SK）

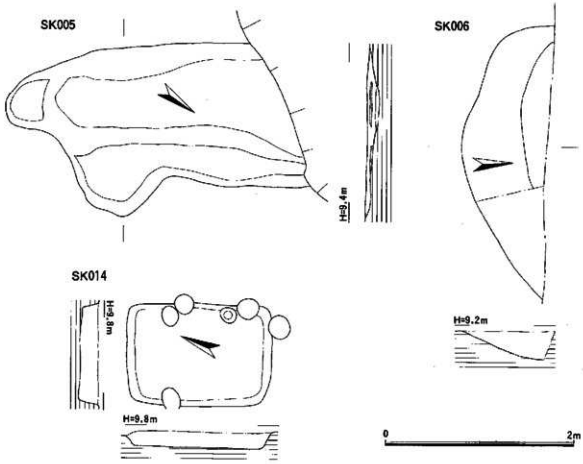
SK005（第5図）

調査区西端部で検出する。SK006との切り合いは不明瞭である。幅1.5m～1.8mの溝状を呈し、深さは15cm程である。壁の立ち上がりは非常に緩く緩慢である。埋土はローム小ブロックを含む黒褐色土である。土師器小皿が出土する。

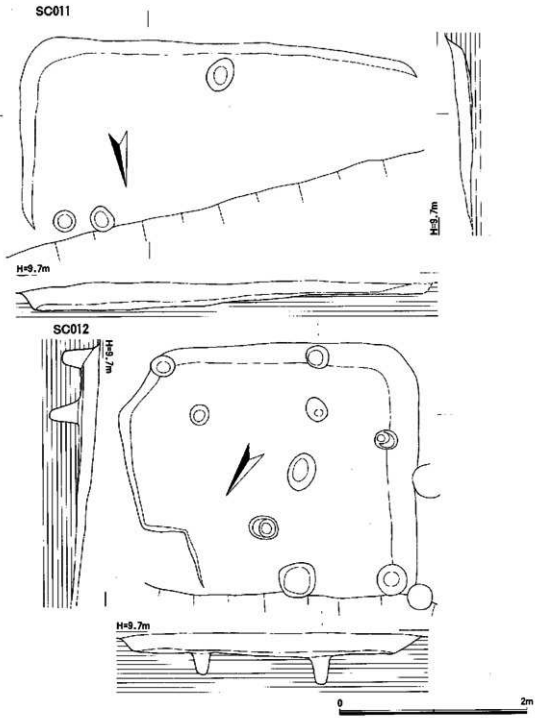
出土遺物（第7図13）

土師器小皿である。1/3破片で口径7.9cm、器高1.7cmに復元できる。外底面には糸切りが行われる。色調淡褐色を呈する。

SK006（第5図）



第5図　土坑実測図(1/40)

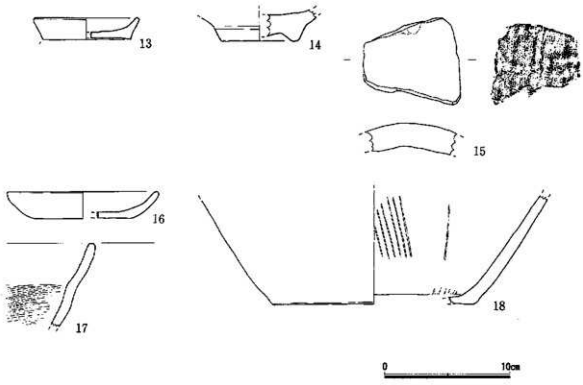


第6図　竪穴実測図(1/40)

調査区西壁部で検出し、調査区境界にかかり全体を検出していない。SK005との切り合いは不明瞭である。径3m以上の不整な円形をなすものであろうか。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さ35cmを測る。埋土は淡黒色土である。白磁・瓦の小破片が出土する。

出土遺物（第7図14・15）

14は白磁椀である。胎土は気泡の多く混じる乳白色で、焼成はやや甘い。釉は透明感がなくやや青みを帯る白色である。全面に施釉され、外底面畳付きの部分が露胎となる。内底面には目跡が残る。15



第７図　SK005・006、SC012出土遺物実測図(1/3)

は平瓦である。色調は青灰色を呈す。外面はナデを行い、内面には布目が残る。

SK014（第５図）

調査区東端部で検出する。長軸1.5ｍ・短軸1.1ｍを測り、平面長方形を呈する。検出面からの深さは20cmと浅いが、掘り方はしっかりしており、壁は直立し隅角はきちんとしている。底面は細かな凹凸もなく平坦に仕上げられる。埋土は黒色土と鳥栖ロームの１：１の混合土で、人為的な埋め立てが行われたと考えられる。形態等から墓壙遺構の可能性が高い。遺物は僅少であるが溝・他の土坑等と同様の中世に属するものであろう。

竪穴（SC）

２基の竪穴遺構が検出されている。いずれも中世に属するものであるが、用途として住居と確認できないため竪穴として報告する。なお土坑とは区別するため遺構略号はSCを用いる。

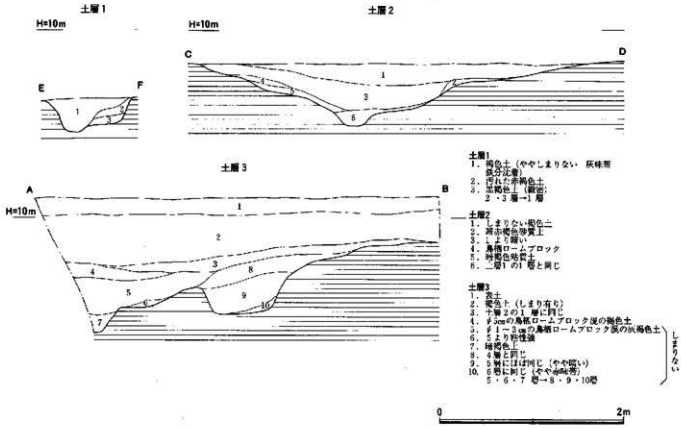
SC011（第６図）

調査区中央部で検出する。北側をSD001と切り合うが先後関係は不明である。東西長は約4.3ｍを測る。壁の立ち上がりは緩く、壁高20cm程度である。床面には凹凸が少ないが西に向かってやや高くなる。埋土はローム小粒を含んだ褐色土で締まりはない。床面に焼土等はなく、ピットも10cm程度のもののみである。出土遺物は僅少である。時期的にはSC012と近接するものであろか。

SC012（第６図）

調査区中央部で検出する。SC011同様に北側をSD001と切り合うが先後関係は不明である。南北長2.7ｍ以上、東西長は3.2ｍを測る。東壁の南側は50cm程の張り出しを有している。壁の立ち上がりは緩く、壁高20cm程度である。床面はほぼ平坦で北西に向かってやや低くなる。埋土はSC011同様にローム小粒を含んだ褐色土で締まりはない。床面には焼土等はみられない。出土遺物には土師皿・鉢等がある。

出土遺物（第７図16～18）



第８図　SD001土層実測図(1/40)

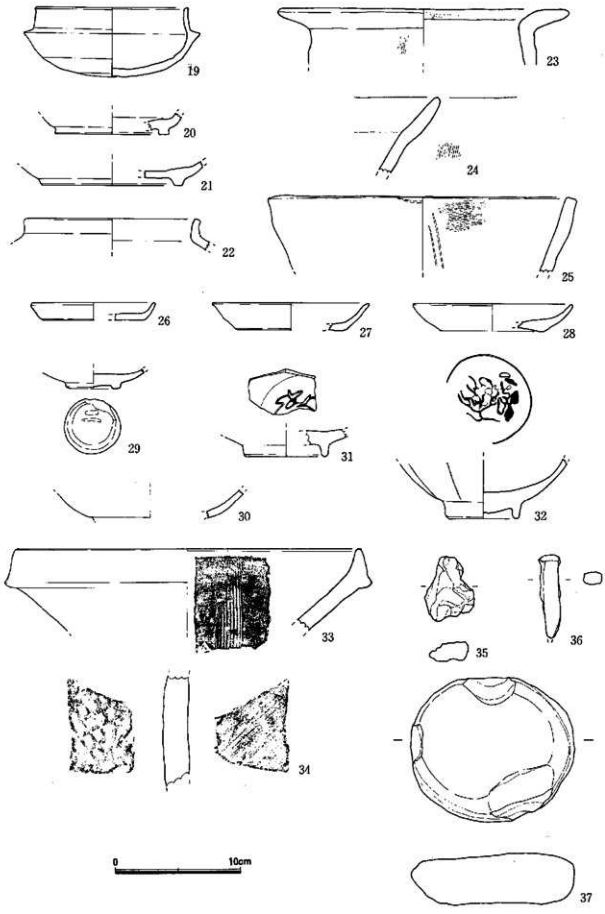
16は土師皿である。1/4破片で口径11.8cm、器高２cmに復元できる。器壁の磨滅が激しく調整は不明である。17は土師質の鉢である。口縁部は屈曲後緩やかに内湾する。内面には細かい横刷毛が行われている。また外面には厚く煤が付着する。18は土師質の擂鉢である。内面に最低６本１単位のすり目が残る。色調は淡い橙色を呈し、器面の磨滅が進む。また外面には煤が薄く付着する。

溝（SD）

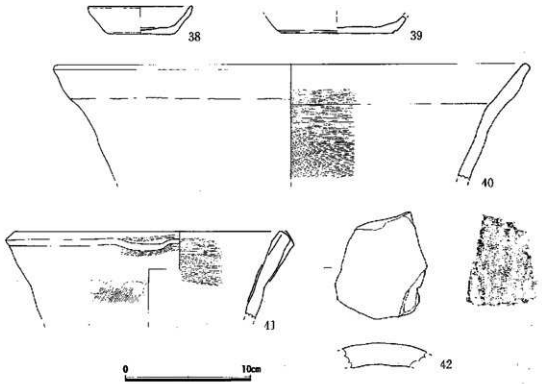
SD001（第８図）

調査区北端にそって東西方向に伸びる溝である。溝幅は最大で４ｍ、深さは東側で70cm弱、削平を受けている西側で20cmである。溝底標高９ｍで全体にわたりほぼ平坦である。溝壁は緩やかに立ち上がり、部分的に半坦面を有する。また底には断面箱型の掘り込みがあり、西側ではこの部分のみが残存している。溝底土層から掘り直しが想定でき、埋没しかかった溝を北側に掘り広げている状況が観察出来る（土層１の１層と土層３の５～７層が対応し、溝の拡張部分にあたる）。溝底には円形で深さ30cmの掘り込み（016）と長方形で深さ50cm弱の掘り込み（017）が確認された。埋土は溝最下層の暗褐色土と同じで出土遺物にも特に差異は認められないため、この溝に伴う何らかの掘り込みと考えている。

またSD001は３次調査でも確認されており、３次調査区東端で南方向に矩形に折れ曲がっている。



第９図　SD001出土遺物実測図１(1/3)

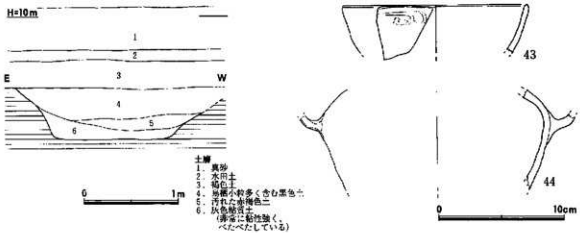


第10図　SD001出土遺物実測図２(1/3)

この溝で囲まれた内側には掘削深の深いピットが多く検出されており、多数の掘立柱建物が復元できる。時期的には中世の後半期（14・15世紀）にあたり、該期の居館跡と考えられる。なお溝による区画全体の範囲は不明である。

出土遺物（第９・10図）

19～37はSD001埋土出土、38～40は016 、41・42は017出土遺物である。19～22は須恵器である。19は坏身である。20・21は高台付きの坏である。22は壺の口縁部である。23～28は土師器・土師質土器である。23は甕である。口縁部は逆Ｌ字状に屈曲し、器壁は厚手となる。胴部外面及び口縁部内面に刷毛目が残り、胴部内面にはヘラ削りを行う。24は鍋口縁部である。全面に２次焼成を受けており、器面が荒れている。色調は茶褐色を呈する。25は擂鉢である。内面には刷毛目及び擂り目が残る。また注ぎ口の一部が僅かに残る。色調は淡褐色を呈する。26は小皿である。復元口径9.7㎝、器高1.4㎝である。27・28は皿である。27は復元口径12.4㎝、器高2.2㎝で、28は復元口径12.6㎝、器高2.2㎝を測る。26～28はいずれも外底面は糸切りによる。29・30は白磁である。29は皿である。胎土はベージュ色を呈し、釉は乳白色である。外底面の高台からやや上部より露胎となる。また外底面に墨書が見られるが漢字の「二」であろうか。30は椀である。胎土は灰褐色、釉は透明感のある淡褐色で氷裂がみられる。31・32は青磁である。31は胎土は灰色で釉は灰緑色を呈する。外底面は露胎となり、内面見込みには花文が施される。32は釉は緑色を呈する。外底面中央に釉を残し、高台までの釉を削り取る。外面には片切彫りの縦方向の沈線があり、内面見込みには花文が施される。また図示していないがSP057出土青磁皿（第12図50）と同一固体で接合する破片も出土している。建物と溝の平行関係が確認できる資料である。33は備前焼の擂鉢である。口縁部は鴨状を呈する。34は平瓦である。灰色を呈



第11図　SD010土層実測図及び出土遺物実測図(1/40、1/3)

する。外面格子目のタタキを行い、内面には布目が残る。

35は小定型の鍛冶滓である。重量は45gを測り、メタルは残っていない。36は鉄釘である。残存長6.6cmを測る。37は花崗岩製の磨石である。部分的に被熱の痕跡が残る。

38～41は土師器・土師質土器である。38は小皿で口径8.2cm。器高2.2cmである。外底面は糸切り。39は皿で外底面糸切りで板状圧痕が残る。40は鍋である。口縁外面に煤が付着し、内面の屈曲部付近に内容物の炭化物が付着する。41は注口付きのこね鉢である。42は平瓦で内面に布目が残る。

SD010（第11図）

調査区西端部で検出する。西壁が検出できていないが、検出面での幅約2.2mに復元でき、深さは50cmを測る。底面は平坦で壁はしっかりと立ち上がる。埋土は最下層に滞水による非常に粘性の強いヘドロ状の粘質土が堆積し、砂層は全く見られない。時期的にはSD001に近く関連も考えられるが、形態・埋土は全く異なっている。

出土遺物（第11図）

43は龍泉窯系の青磁椀である。口縁部直下の外面にヘラ描きの雷文帯が巡る。44は把手付きの須恵器の壺である。把手は横元幅5cm、厚み5mmの舌状を呈する。

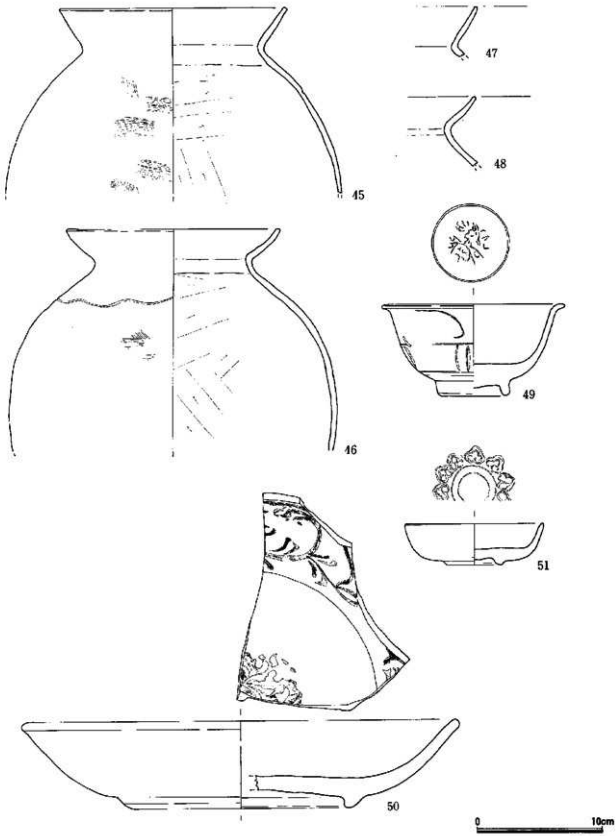
その他の遺物（第12図）

45～48は布留式甕である。いずれも口縁端部のつまみ出しは見られず、屈曲も立ち気味である。49～51は青磁である。49はオリーブ色の釉を外底面のみはぎ取る。外面には片切り彫りによる蕉葉文、内面には花文を施す。50は皿である。釉は明るい緑色を呈し、全面に施釉される。外底面に重ね焼きによる釉の欠失が輪状に認められる。内面には草花文が施される。51は内底面に象嵌を有する高麗青磁椀である。淡灰緑色の釉を全面に施す。

3．小結

本調査区では14・15世紀代の溝に囲まれた居館を中心とした遺構群を検出した。遺構の広がりは周辺の調査が行われていない現在では不明な点が多い。しかし3次調査結果、および該期に行われたと考えられる大規模な整地・削平を考え合わせると、居館としてもかなりの規模を想定できるのではないだろうか。周辺では諸岡館址等が発掘されており、その成果も参考にし、今後の検討課題としたい。

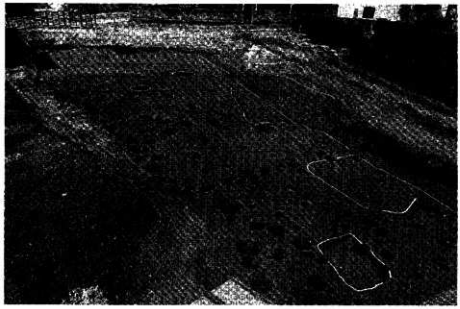
また前述のように削平によりその大半が欠失していると考えられる居館形成以前の遺構については、4次調査においては古墳時代の井戸を検出するのみである。しかし3次調査においては弥生時代中期～11世紀までの遺構が少数ながら確認されており、対象地及びその周辺が弥生時代以来間断なく生活の場として利用されてきた事を伺うことができる。



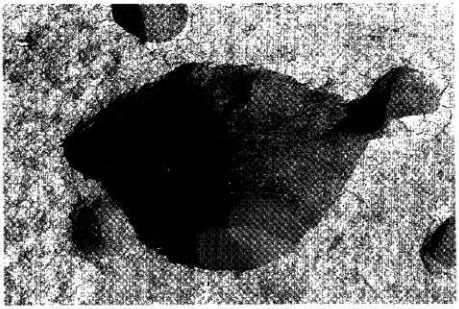
第12図　その他の遺物実測図(1/3)

1　作業風景

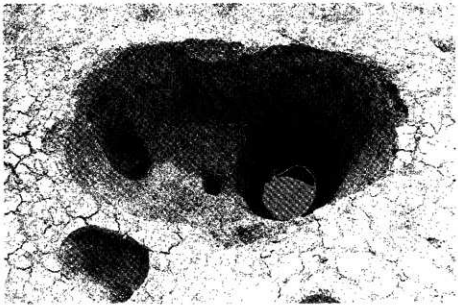
2　調査区全景
（西から）



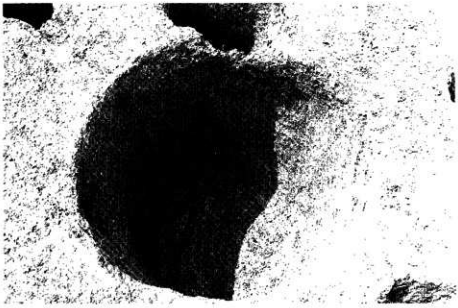
3　調査区全景
（東から）



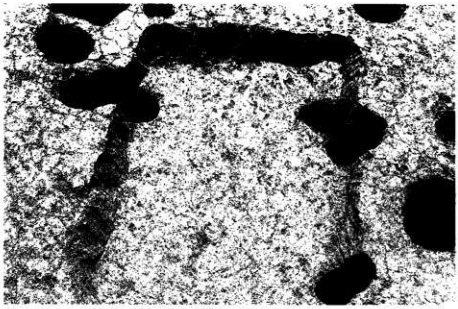
4　SE008（東から）



5　SE009（東から）

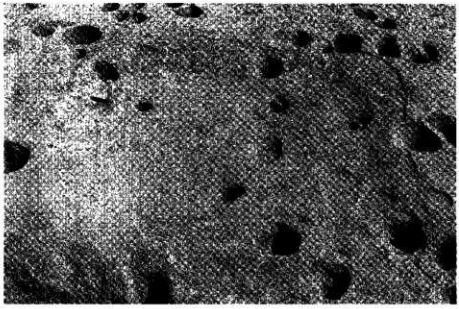


6　SE013（南から）

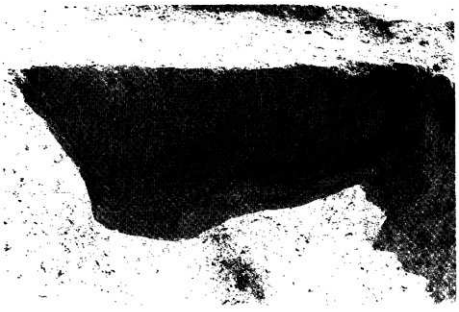


7　SK014（東から）

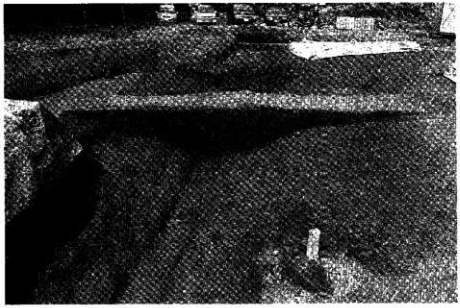
8　SC011（北から）



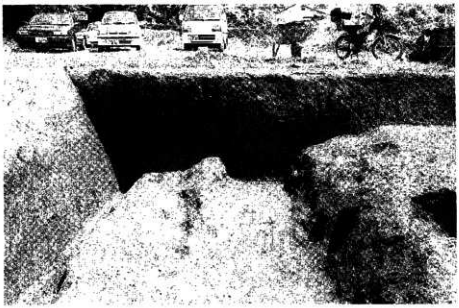
9　SC012（北から）



10 SD001土層 1



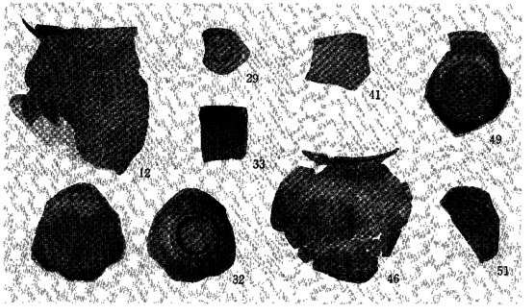
11 SD001土層 2



12 SD001土層 3

13　SD010土層

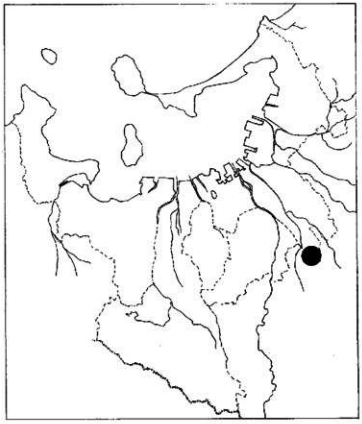
14　SD010（北から）



15　出土遺物

雑餉隈遺跡

— 第9次発掘調査 —



遺跡略号　ZSK－9
遺跡調査番号　9648

例　言

1．本章は、1996年度に行われた開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した雑餉隈遺跡群第９次調査の報告である。調査の担当は加藤隆也である。
2．本書に使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。
3．遺構の呼称は記号化し竪穴住居をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、溝をＳＤ、柱穴をＳＰとした。
4．本書で用いる方位は全て磁北である。
5．本章の執筆は加藤が行った。
6．本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9648		遺跡略号	ＺＳＫ－９	
調査地地番	博多区元町３丁目１番				
開発面積	823.77㎡	調査対象面積	823.77㎡	調査実施面積	733㎡
調査期間	1996年10月23日～1996年11月29日				

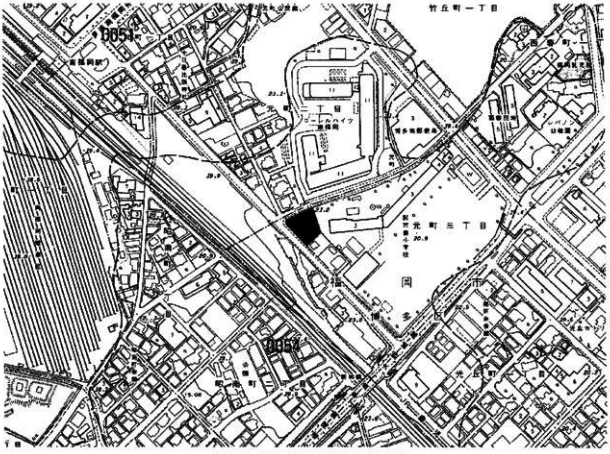
Ⅰ はじめに

1．調査に至る経緯

1996年7月22日、博多区元町3丁目地内におけるマンション建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの雑餉隈遺跡群の西側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1996年8月8日に試掘調査を実施した。現況は宅地で、調査の結果、地表土下20～50cmのローム層上面にて遺構が確認された。よって、面積823.77㎡を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1996年10月23日～1996年11月29日まで行った。

2．調査の組織

調査委託　株式会社リクルートコスモス
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　町田英俊
調査総括　文化財部長　　後藤直（前）　平塚克則（現）
　　埋蔵文化財課長　荒巻輝勝
　　埋蔵文化財課第2係長　山口譲治
庶務担当　埋蔵文化財課第1係　　西HH結香（前）　河野淳美（現）
調査担当　埋蔵文化財課　加藤隆也
試掘調査　松村道博　池田祐司



第1図　調査地点位置図（1/4,000）

Ⅱ　調査の記録

調査の概要

今回の調査地点は雛納景遺跡の西側に位置し、遺構は地表土である黒褐色土直下のローム層上面において検出された。遺構面はほぼ平坦で遺構検出レベルに高低差はみられない。検出された遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物2軒、土坑27基である。遺構掘削終了後ローム層が良好に残存しているため2×2mのグリッドを5ヶ所設定しローム層の掘削を行った。各グリッド30～40cmの掘削を行ったが、遺物は出土しなかった。

1）竪穴住居跡（SC）

SC－09（第3図、図版1）

調査区北西隅にて確認された。SK－10を切り、北西側は調査区外へのびる。東辺は2.8mをはかり、平面は四角形を呈すると考えられる。壁面は遺存状態の良いところで深さ35cmを測り、床面はほぼ平坦である。床面上南側壁際に長軸75cm、短軸50cm、深さ15cmの浅いへこみがみられる。主に住居の北側において白色粘土塊が多くみられることからカマドは北壁に位置するものと考えられる。床面からは主柱穴と考えられる遺構は確認されなかった。

出土遺物（第4図）

1～5は坏蓋である。1は土師器のつまみ付き坏蓋であり、口径11.1cmを測る。2、3は須恵器の坏蓋である。それぞれの口径は12.4cm、13.6cmを測る。4は円筒形状のつまみがつき、体部と口縁部の内側の境は不明瞭である。口径14.2cm、器高3.6cmを測る。5は須恵器の坏蓋である。口縁部の断面は三角形にちかい。口径15.6cmを測る。6、7は須恵器の高台付坏である。6は高台の断面は四角形を呈し、口径13.4cm、底径7.8cm、器高4.0cmを測る。7の高台は底端部近くにつき、口径13.6cm、底径8.2cm、器高4.0cmを測る。8は須恵器の無高台坏である。口径14.8cm、底径9.0cm、器高4.8cmを測る。9は土師器の皿である。口径17.0cmを測る。10は須恵器の皿である。口径16.8cm、底径14.1cm、器高2.0cmを測る。11は壺の底部である。底径13.2cmを測る。12は須恵器の小壺である。口縁部は上方に立ち、口径8.0cmを測る。13、14は土師器の甕である。13の口径は24.9cmを測る。15は甑の取っ手部分の破片である。

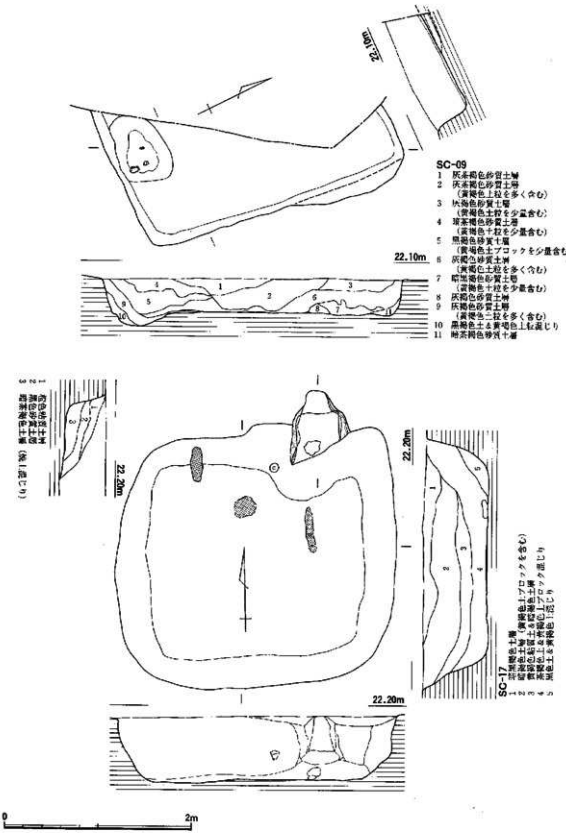
SC－17（第3図、図版2）

調査区南西側にて確認された。東西3.0m、南北2.8m、深さ70cmを測る。カマドは北壁東よりに位置し、SC－09と方向を同じくする。床面上にはカマドに使われていたと思われる白色粘土塊がみられる。カマド壁は火熱をうけて赤色化しており、焚口部には炭化物が少量みられる。床面の顕著な整地は特にみられなかった。

出土遺物（第4図）

16～19は須恵器の坏蓋である。16はボタン状のつまみがつき、口径15.0cm、器高2.0cmを測る。17は円筒状のつまみがつく。口径15.6cm、器高1.9cmを測る。18、19は口縁部の断面が三角形をなし、それぞれの口径は18.8cm、19.0cmを測る。20～23は須恵器の高台付坏である。それぞれの底径は20は6.6cm、21は7.9cm、22は7.2cm、23は8.8cmを測る。24、25は無高台の須恵器坏である。24の底径は8.4cmを測る。25は口径14.0cm、底径9.4cmを測る。26、27は須恵器の皿である。26は口径14.9cm、底径11.9cm、器高2.0cmを測る。27は口径17.4cm、底径13.7cm、器高2.3cmを測る。28は須恵器の壺口縁部である。

第2図　雑餉隈遺跡第9次調査遺構配置図(1/150)



第３図　竪穴住居SC－09、17(1/40)

口径8.4cmを測る。29～32は土師器の甕である。それぞれの口径は29が26.8cm、30は18.8cm、31は15.8cm、32は21.0cmを測る。

2）掘立柱建物（ＳＢ）

調査区全体に浅い小ピット状の遺構がひろがるが、深さも概して浅く、柱痕跡もみられないことから、植物の根や地表面の凹凸などの影響に由来するものと思われる。

ＳＢ－01（第5図、図版2）

調査区北西側にて検出された南北棟掘立柱建物である。建物の計画方位はN-14°-Wをとる。２×４間分の柱穴を確認したが、さらに北側にのびる可能性がある。桁行４間（9.6m）、梁行２間（5.2m）、柱間寸法は桁行８尺（平均2.4m）、梁行９尺（平均2.6m）をはかるが、西側柱筋の南側１間分は９尺の柱間をもち、入口などの施設が想定される。柱穴の平面形には略方形のものと略円形を呈するものとが混在する。柱穴の深さは50～85cmをはかり、ＳＰ－04で顕著な柱の抜き取り痕がみられた。いくつかの柱穴で柱圧痕や土層断面で柱痕跡がみられた。ただし、柱圧痕がみられないものや、柱材抜き取り時の影響なのか柱圧痕と断面の柱痕跡が一致しないものもみられた。遺存状態のよいものでみると柱径15～20cm程度をはかる。柱穴から時代のわかる遺物は出土していない。

ＳＢ－02（第6図、図版3）

調査区東側にて検出され、中軸N-81°-Eをとる東西棟掘立柱建物である。２×５間分の柱穴を確認したが、さらに東側にのびる可能性がある。桁行４間（9.55m）、梁行２間（5.5m）、柱間寸法は桁行８尺（平均2.39m）、梁行９尺（平均2.75m）をはかる。柱穴の平面形には略方形のものと略円形を呈するものとが混在する。柱穴の深さは55～80cmをはかり、ＳＰ－16、19で顕著な柱材の抜き取り痕がみられた。いくつかの柱穴で柱圧痕や土層断面で柱痕跡がみられた。ただし、柱材抜き取り時の影響なのか柱圧痕と断面の柱痕跡が一致しないものもみられた。遺存状態のよいものでみると柱径20～25cm程度をはかり、ＳＢ－01に比べやや太い。

出土遺物（第7図）

33はＳＰ－13から出土した須恵器の坏蓋である。天井部は平坦であり、外面に自然釉が付着し、器面調整は不明である。

3）土　坑（ＳＫ）

ＳＫ－01（第8図、図版3）

Ｄ２、Ｄ３グリッドにて検出された。平面は略円形を呈し、長軸1.4m、深さ25cmをはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－02（第8図、図版3）

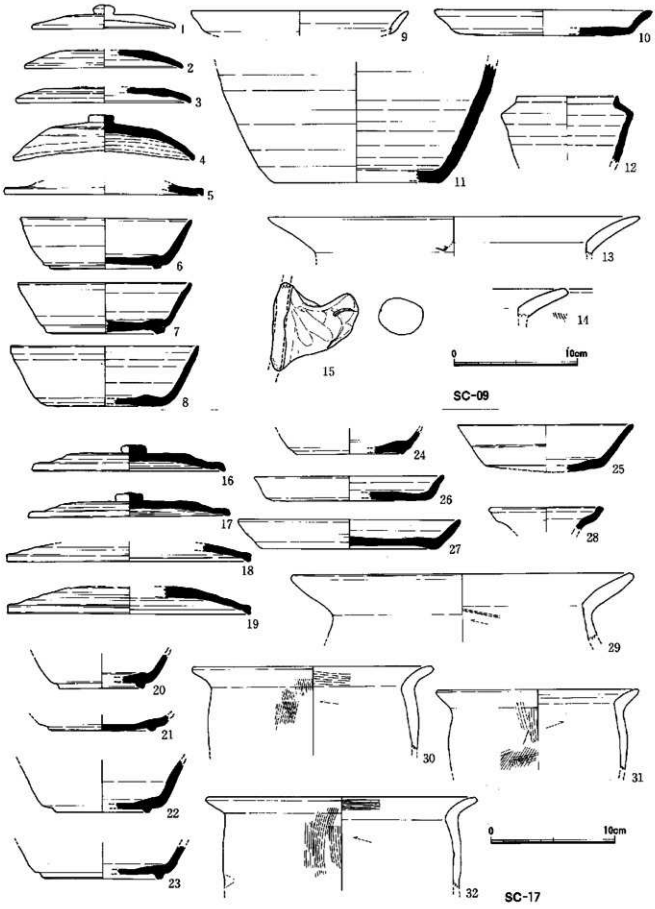
グリッド番号Ｃ２、Ｃ３、Ｄ２、Ｄ３にて検出された主軸W-83°-Eをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.4m、深さ24cmをはかる。遺物は土師器片、須恵器坏片が出土した。

ＳＫ－03（第8図、図版3）

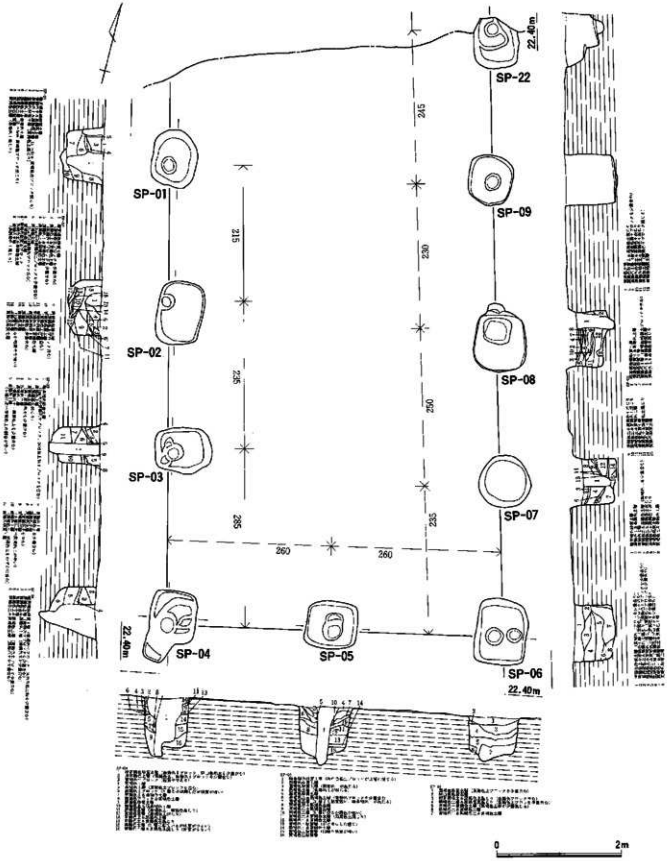
Ｃ２、Ｃ３グリッドにて検出された。平面は略円形を呈し、長軸1.5m、深さ23cmをはかる。遺物は土師器片、黒曜石の石鏃が出土している。

ＳＫ－04（第8図、図版3）

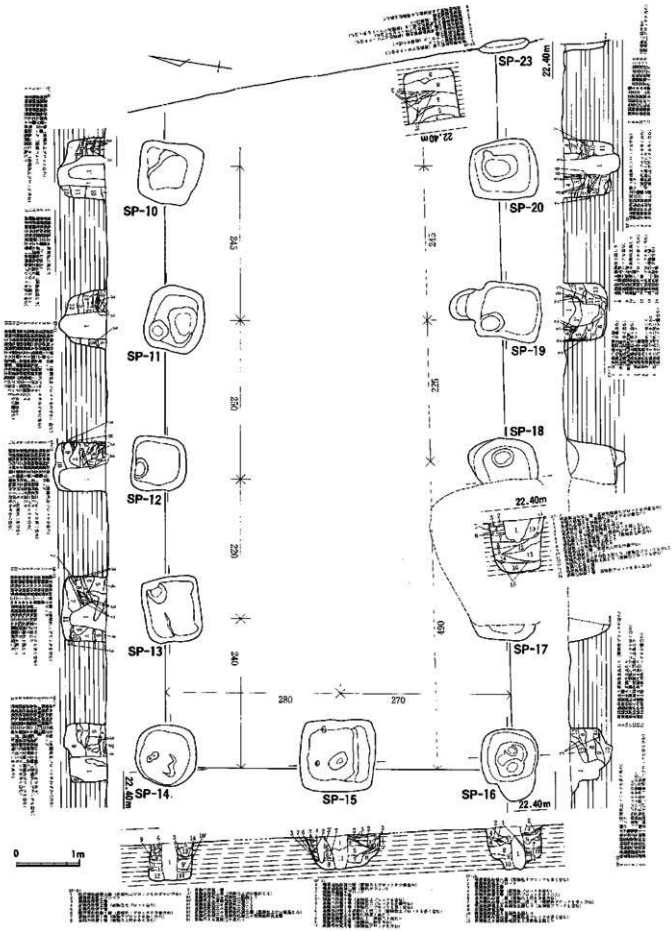
グリッド番号Ｃ２にて検出された主軸N-88°-Eをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.1m、深さ23cmをはかる。土師器片が３点出土した。



第4図　竪穴住居出土遺物(1/3)



第5図　掘立柱建物SB－01(1/60)



第6図　掘立柱建物SB－02(1/60)

第7図　SB-02出土遺物(1/3)

ＳＫ－05（第8図、図版4）

グリッド番号Ｃ2にて検出された主軸N-3°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸2.6m、短軸1.45m、深さ17cmをはかる。須恵器坏小破片が出土している。

ＳＫ－06（第8図、図版4）

Ｂ2、Ｃ2グリッドにて検出された主軸N-12°-Eをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.5m、深さ35cmをはかる。

出土遺物（第11図）

34は須恵器の高台付坏である。口径15.2cmを測る。体部は緩やかに外反する。**35**は須恵器の坏口縁部の破片である。**36**は須恵器の坏蓋口縁部である。断面は三角形にちかく、体部より外反して屈曲する。**37**須恵器の皿である。口縁部は外反する。

ＳＫ－07（第8図、図版4）

Ｂ2、Ｃ2グリッドにて検出された主軸N-8°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.2m、深さ27cmをはかる。土師器片が出土している。

ＳＫ－08（第8図、図版4）

グリッド番号Ｂ2にて検出された主軸N-13°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.1m、深さ30cmをはかる。土師器片が出土している。

ＳＫ－10（第8図）

Ｂ1グリッドにて検出された主軸N-18°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸2.7m、短軸1.6m、深さ20cmをはかる。土師器片が出土している。

ＳＫ－11（第8図）

グリッド番号Ａ2、Ｂ2にて検出された主軸N-75°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸3.2m、短軸1.8m、深さ10cmをはかる。遺物は須恵器の小破片が出土している。

ＳＫ－12（第8図、図版4）

Ｂ2グリッドにて検出された主軸N-78°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸2.6m、短軸1.5m、深さ26cmをはかる。土師器片、須恵器片が出土している。

ＳＫ－13（第9図）

Ｂ2グリッドにて検出された土坑である。平面は不整形を呈し、長軸2.4m、短軸1.6m、深さ7cmをはかる。土師器片が出土している。

ＳＫ－14（第9図）

グリッド番号Ｂ2、Ｂ3にて検出された土坑である。平面形は不明である。

出土遺物（第11図）

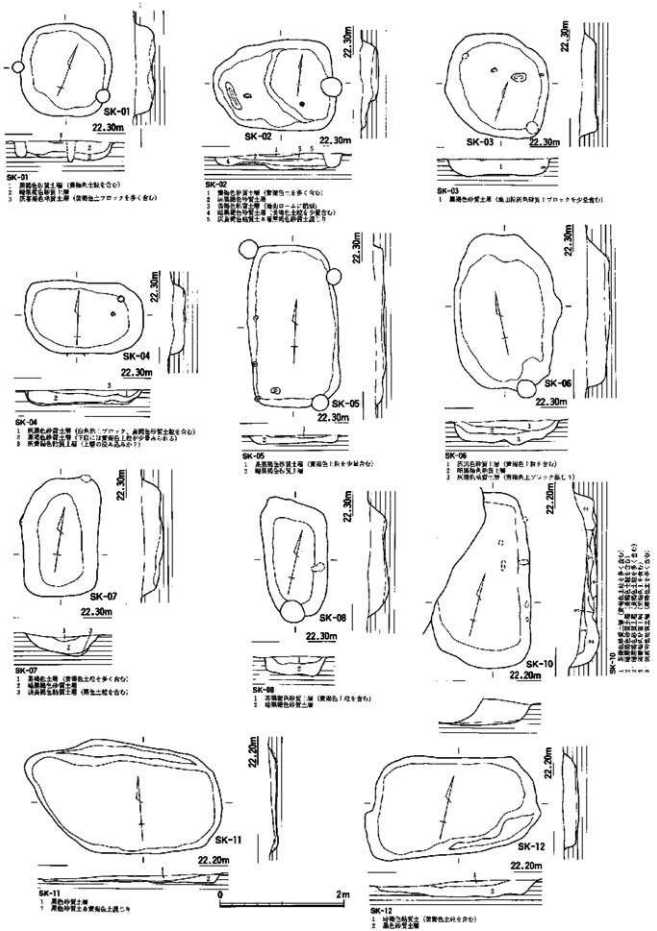
38は須恵器の無高台坏である。底径は7.5cmを測る。**39**は須恵器坏である。口径は13.6cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。

ＳＫ－15（第9図）

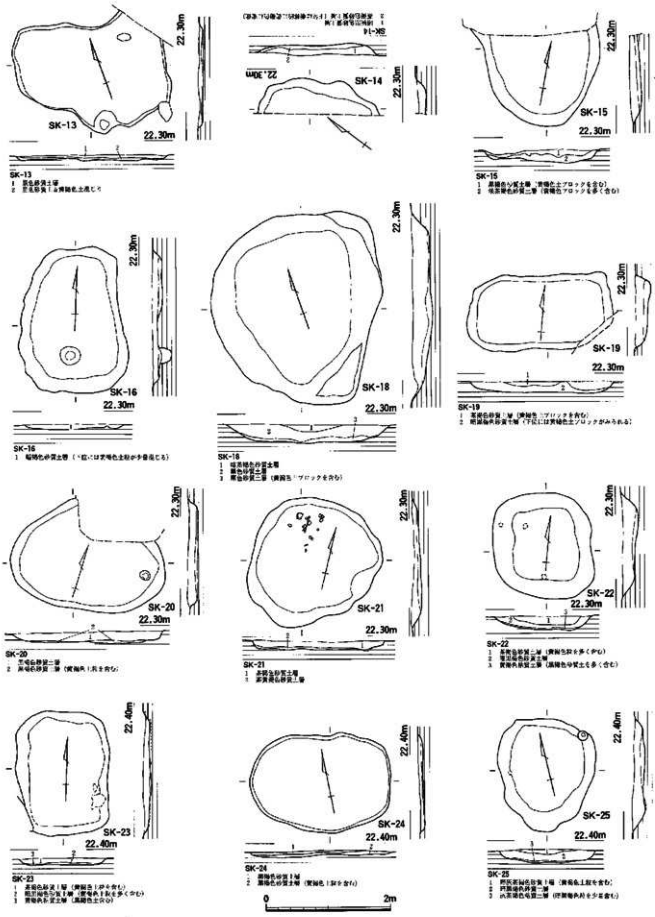
Ｂ2、Ｂ3グリッドにて検出された土坑である。北側を攪乱に切られ、平面は略長方形を呈する。短軸1.85m、深さ20cmをはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－16（第9図、図版4）

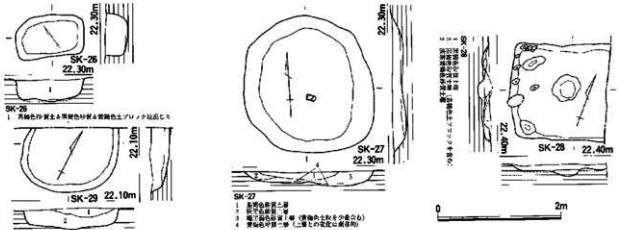
Ｂ2、Ｂ3、Ｃ2、Ｃ3グリッドにて検出された主軸N-3°-Wをとる土坑である。平面は略長方形


SK-01
22.30m
SK-02
22.30m
SK-03
22.30m
SK-04
22.30m
SK-05
22.30m
SK-06
22.30m
SK-07
22.30m
SK-08
22.30m
SK-10
22.20m
SK-11
22.20m
SK-12
22.20m
0
2m

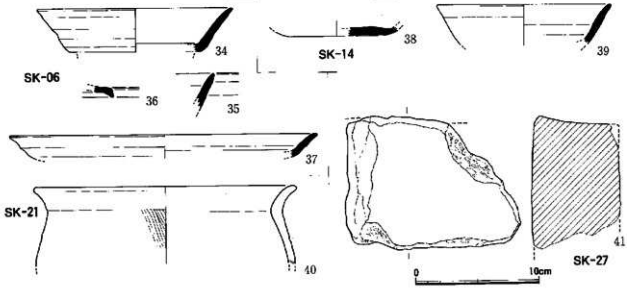
第８図　土坑１ (1/60)


SK-13
22.30m
SK-14
22.30m
SK-15
22.30m
SK-16
22.30m
SK-18
22.30m
SK-19
22.30m
SK-20
22.30m
SK-21
22.30m
SK-22
22.30m
SK-23
22.40m
SK-24
22.40m
SK-25
22.40m
0
2m

第９図　土坑２(1/60)



第10図　土坑３(1/60)



第11図　土坑出土遺物(1/3)

を呈し、長軸2.25m、短軸1.6m、深さ10cmをはかる。土師器片が出土している。

ＳＫ－18（第９図）

グリッド番号Ｂ３にて検出された土坑である。平面は略円形を呈し、長軸3.1m、短軸３m、深さ29cmをはかる。土師器片、須恵器片が出土している。

ＳＫ－19（第９図）

グリッド番号Ｂ３、Ｃ３にて検出された主軸N-84°-Wをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.3m、深さ16cmをはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－20（第９図）

グリッド番号Ｂ３、Ｂ４、Ｃ３、Ｃ４にて検出された土坑である。平面は不正形を呈し、長軸2.3m、短軸1.9m、深さ18cmをはかる。遺物は土師器の甕破片が出土している。

ＳＫ－21（第９図）

Ｃ３、Ｃ４グリッドにて検出された土坑である。平面は略円形を呈し、長軸2.2m、短軸2m、深さ13cmをはかる。図化したもの以外に土師器甕の破片が出土している。

出土遺物（第11図）

40は土師器の甕である。口径20.4㎝を測る。器面調整は外面をハケ目、内面をヘラケズリ調整している。

ＳＫ－22（第９図）

Ｃ３グリッドにて検出された土坑である。平面は略方形を呈し、長軸1.6ｍ、短軸1.4ｍ、深さ24㎝をはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－23（第９図）

グリッド番号Ｃ３にて検出された主軸Ｎ-1°-Ｗをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸２ｍ、短軸1.5ｍ、深さ10㎝をはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－24（第９図、図版４）

グリッド番号Ｃ４にて検出された主軸Ｎ-78°-Ｗをとる土坑である。平面は略長楕円形を呈し、長軸2.3ｍ、短軸1.5ｍ、深さ８㎝をはかる。須恵器坏の破片が出土している。

ＳＫ－25（第９図）

Ｃ４グリッドにて検出された主軸Ｎ-13°-Ｅをとる土坑である。平面は不正形を呈し、長軸1.77ｍ、短軸1.5ｍ、深さ19㎝をはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－26（第10図）

Ｃ３、Ｃ４グリッドにて検出された主軸Ｎ-56°-Ｗをとる土坑である。平面は略長方形を呈し、長軸1.1ｍ、短軸60㎝、深さ35㎝をはかる。獣骨が出土している。埋土のしまりかたから新しいものと思われる。

ＳＫ－27（第10図、図版４）

グリッド番号Ｃ４にて検出された土坑である。平面は略円形を呈し、長軸2.1ｍ、短軸２ｍ、深さ21㎝をはかる。

出土遺物（第11図）

41は土製品である。短辺10.5㎝、厚さ７㎝を測る。胎土は２～４㎜の砂粒を含み、焼成は良好である。表面は摩滅しており調整は不明である。

ＳＫ－28（第10図）

Ｃ３、Ｃ４、Ｄ３、Ｄ４グリッドにて検出された主軸Ｎ-68°-Ｅをとる土坑である。遺構の東側は調査区外にのびる。短軸1.5ｍ、深さ13㎝をはかる。遺物は出土していない。

ＳＫ－29（第10図）

Ｂ１グリッドにて検出された土坑である。遺構の北側は調査区外にのびる。短軸1.45ｍ、深さ30㎝をはかる。遺物は出土していない。

Ⅲ　まとめ

本調査において検出された遺構は、８世紀後半頃の掘立柱建物、竪穴住居、土坑である。掘立柱建物は大型のもので西へ14°振ってＬ字に配置する。土坑群は掘立柱建物の内側にはみられず、建物とも切り合わない。また、出土遺物からもそれと同時期と考えられる。ただし、その性格は不明である。竪穴住居は土坑を切っているが、出土遺物からその時期差はみられない。

Ⅳ　雑餉隈遺跡９次調査の土坑に関する自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

雑餉隈遺跡の９次調査では、８世紀頃の大型建物跡が検出され、さらにそれを囲むような土坑が検出された。土坑は深さ20cm、径１m程度であり、建物跡と同時期のものと考えられたが、その性格については不明である。本報告では、土坑の性格を推定するために覆土の理化学分析を実施した。特に今回は動物遺体や植物遺体の埋納を想定し、リン酸含量および腐植含量を測定する。

２．試料

試料は、S-04、S-05、S-06、S-07、S-08、S-27の各土坑の覆土から①～③の３点ずつ（S-07は２点）採取された。分析には、各土坑につき①の試料１点ずつの合計６点と土坑が構築されていた土層いわゆる地山の試料であるロームG３内１点を選択した。以下土坑試料の表記には土坑番号のみを用いる。

３．分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に各項目の操作工程を示す。

１）リン酸

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約5mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mℓに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。

測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

２）腐植含量

風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜φのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

微粉砕試料0.100～0.500ｇを100mℓ三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mℓを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

４．結果

分析結果を表１に示す。腐植含量は全体的に高い傾向にあるが各土坑ごとに大きく異り、3.74～17.26%の範囲内で大きく変動する。なお、S-06はこれらの中で著しく低い腐植含量である。また、リン酸含量も腐植含量と同様な傾向にあり、0.86～2.28P_2O_5mg/gの範囲内で大きく変動するが特に

高い値ではなく、一般的な値で落ち着いている。

一方、対比試料であるロームG３内の腐植含量は0.80%、リン酸含量は0.60P_2O_5mg/gと著しく低い値である。

表１　土壌理科学分析結果

試料名	土性	土色	P_2O_5(mg/g)	腐植含量(%)
S－04	LiC	10YR 2/1 黒	1.65	12.55
S－05	LiC	10YR 2/1 黒	2.28	17.26
S－06	LiC	10YR 3/2 黒褐	0.86	3.74
S－07	LiC	10YR 2/1 黒	1.54	11.20
S－08	LiC	10YR 1.7/1 黒	2.13	14.82
S－27	LiC	10YR 2/1 黒	1.46	9.44
ロームG３内	HC	10YR 4/6 黒	0.60	0.80

注.(1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。
(2)土性:土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。
LiC…軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)
HC…重埴土(粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)

5．考察

前述したように土坑覆土の腐植含量、リン酸含量は各土坑ごとに大きく異なる結果となった。しかしながら、図１に示したリン酸（P_2O_5）含量と腐植含量の相関図ではリン酸含量と腐植含量は相関係数（R^2）が0.9818と高く、正の相関があることが認められる。このことから覆土中のリン酸は腐植物質を多量に生成する植物遺体に由来するものと指摘される。また、土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen,1983;Bolt-Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g程度である。人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P_2O_5mg/g（川崎ほか,1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0P_2O_5mg/gを越える場合が多い。これらの分析例と比較しても、今回の試料中のリン酸は動物遺体由来である可能性は低く、植物遺体由来であると考えられる。

その植物遺体に由来する土坑覆土の腐植含量は、地山に比べて明らかに高く、またほぼ同一時期に形成されたにもかかわらず、近接する土坑間でのリン酸、腐植含量の差が極めて大きい。これらのことから、覆土中の腐植が自然条件下で富化されたものとは考えにくい。おそらく土坑に植物遺体等が投棄されるなどの人為的要因によるものと推察される。現時点では、調査区の平面図により、腐植含量の比較的低いS-06およびS-27の各土坑は、大型建物を取り囲む他の土坑の列から外側にややはずれた位置にあるということが指摘できるが、それが土坑の性格とどう関係するかはわからない。いずれにしても土坑の性格については、今後の類例の調査分析結果をもって検討する必要がある。

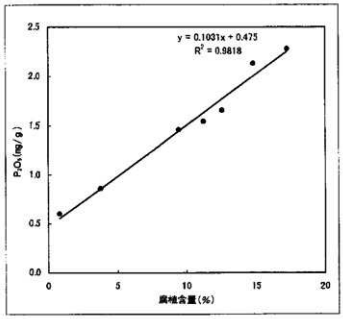


図1　リン酸（P_2O_5）含量と腐植含量の相関図

〈引用文献〉

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』，p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）『環境無機化学 －元素の循環と生化学－』．浅見輝男・茅野充男訳.297p.，博友社［Bowen.H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）『土壌の化学』．岩田進午・三輪睿太郎・井上陵弘・陽　捷行訳,309p.,学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）SOIL CHEMISTRY］,p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）『土壌養分分析法』．440p.,養賢堂.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省　農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』，149p.：p.23-27.

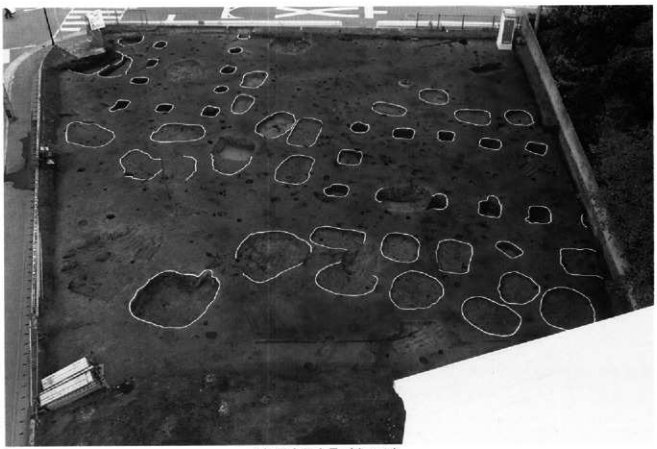
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会編（1984）『土壌調査ハンドブック』．156p.,博友社.

雑餉隈遺跡調査一覧

調査次数	調査番号	所在地	調査期間	調査面積	報告書
1	9024	新和町2丁目10-2,10-6	900718～900825	262㎡	第276集
2	9324	西寒町1丁目17-27	930719～930806	345㎡	第409集
3	9349	西寒町1丁目18	931118～931204	156㎡	第409集
4	9367	新和町2丁目13	940309～930324	105㎡	第409集
5	9407	新和町1丁目2～6	940411～941018	4,754.5㎡	第569集
6	9431	新和町2丁目1-35	940808～940905	481㎡	第528集
7	9523	新和町2丁目14,1	950828～950901	54㎡	第569集
8	9550	新和町1丁目7	960202～960327	395㎡	第569集
9	9648	元町3丁目1番	961023～961129	733㎡	第570集(本書)
10	9670	新和町1丁目	970214～970331	337.5㎡	第569集

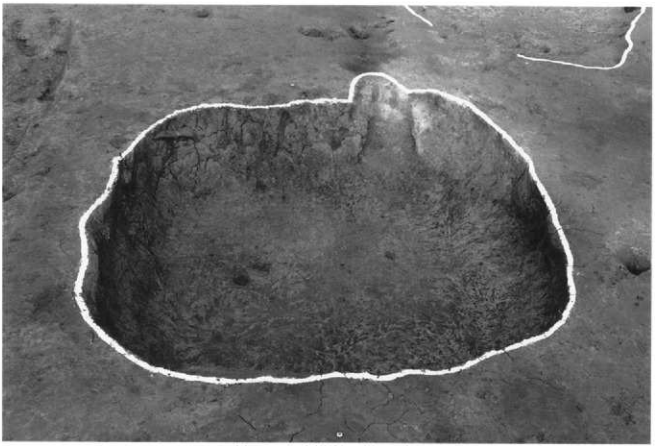
写真1　作業風景



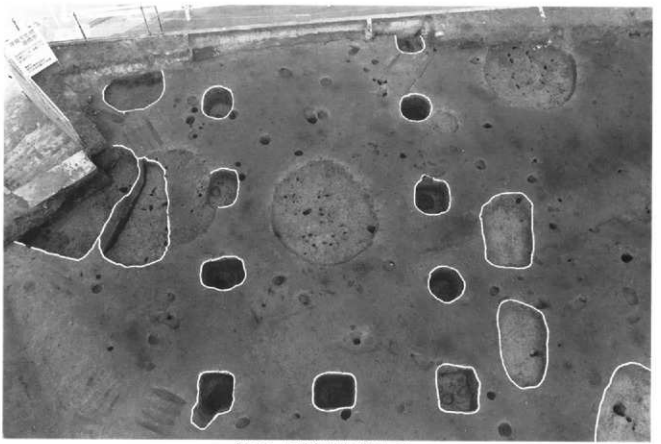
(1) 調査区全景（南から）

(2) SC－09完掘状況（東から）

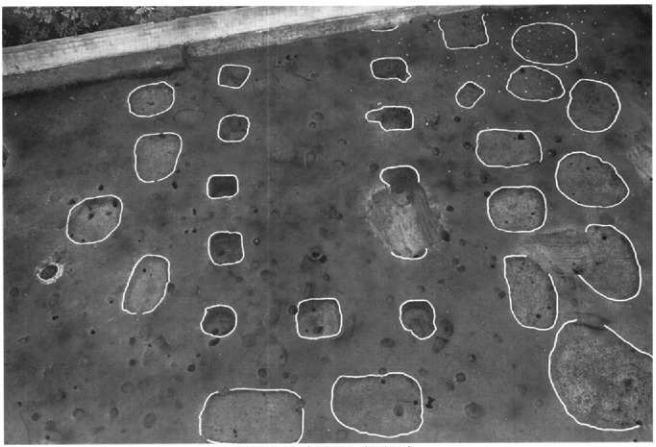
図版 2



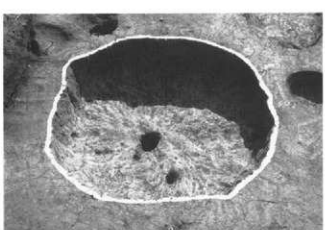
(1) SC－17完掘状況（南から）



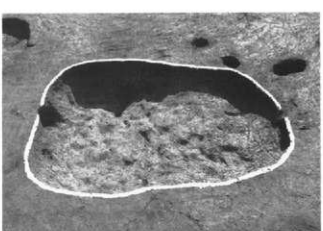
(2) SB－01完掘状況（南から）



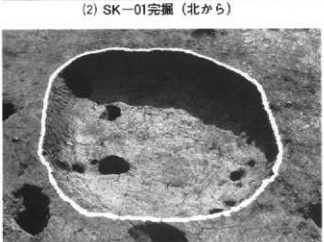
(1) SB－02完掘状況（西から）



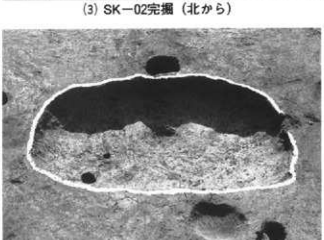
(2) SK－01完掘（北から）



(3) SK－02完掘（北から）



(4) SK－03完掘（北から）

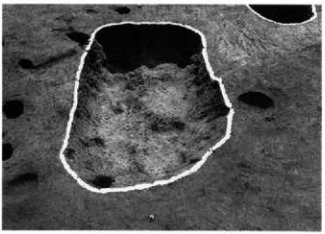


(5) SK－04完掘（北から）

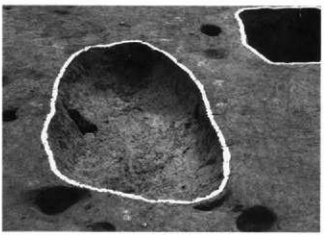
図版 4

(1) SK－05完掘（北から）

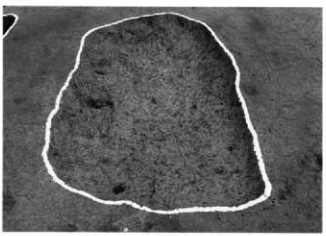
(2) SK－06完掘（北から）



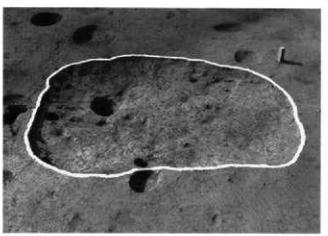
(3) SK－07完掘（北から）



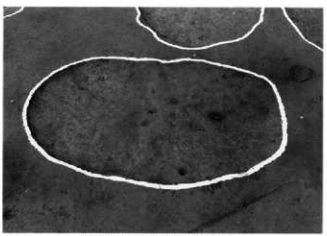
(4) SK－08完掘（北から）



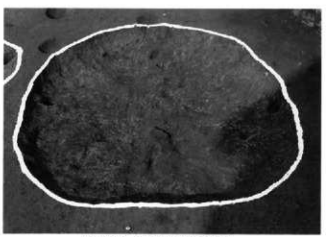
(5) SK－12完掘（西から）



(6) SK－16完掘（東から）



(7) SK－24完掘（南から）



(8) SK－27完掘（南から）

中南部(5)

－五十川遺跡群第3・4次、雑餉隈遺跡群第9次調査報告－

1998年（平成10年）3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　江口印刷株式会社

福岡市南区大楠2丁目22－8